佐久市埋蔵文化財調査報告書　第282集

長土呂遺跡群
上 聖 端 遺 跡 Ⅵ

長野県佐久市長土呂 上聖端遺跡Ⅵ発掘調査報告書

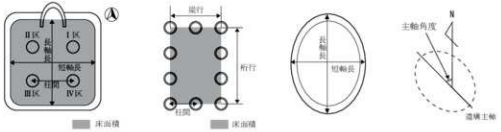
２０２１．９
佐久市教育委員会

例　言

1　本書はIPDロジスティクス株式会社・有限会社市川測量設計による倉庫新築工事に伴う上聖端遺跡Ⅵの発掘調査報告書である。
2　事業主体者　　IPDロジスティクス株式会社・有限会社市川測量設計
3　調査主体者　　佐久市教育委員会
4　遺跡名及び所在地　長土呂遺跡群　上聖端遺跡Ⅵ　(NNK Ⅵ)
　　長野県佐久市長土呂字上聖端 140-1 他
5　調査期間及び面積　発掘調査期間：令和２年４月２日～令和２年６月８日
　　整理作業期間：令和２年６月９日～令和３年９月
　　面積：1,820 ㎡
6　調査担当者　久保　浩一郎
7　本書の編集・執筆は久保が行った。
8　本調査において出土した遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡　例

1　遺構の略称は以下のとおりである。
　　H－竪穴住居址　F－掘立柱建物址　D－土坑　M－溝址　P－ピット
2　遺構断面図の標高は遺構ごとに統一し、スケールバー上に値を示した。遺物実測図は縮尺 1/4 で掲載し、縮尺が異なる場合は個別に縮尺を記載した。
3　遺構の計測値は以下の値である。竪穴住居址は、主軸に沿って十字に土層観察用の畔を設定し、北東側から反時計回りにⅠ～Ⅳ区に区分し、遺物を取り上げた。



4　スクリーントーンの表示は以下のとおりである。

5　遺物写真番号は遺物実測図に対応し、特に記載のないものは縮尺 1/4 で掲載した。
6　本書で示した方位は真北であり、座標値は世界測地系に準拠している。
7　遺物観察表における（　）値は推定値を、〈　〉値は残存値を示す。
8　第１図は、地理院タイルの色別標高図及び陰影起伏図、国土数値情報（行政区域データ）を基に作成した。

目　　次

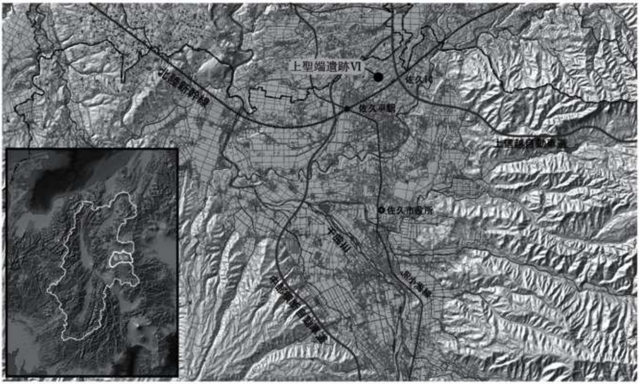
第Ⅰ章　発掘調査の経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第１節　調査にいたる経緯　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第２節　調査組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第３節　調査日誌　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第４節　遺構・遺物の概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　第１節　地理的環境　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　第２節　歴史的環境　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　第３節　発掘調査の方法と基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

第Ⅲ章　遺構と遺物　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　第１節　竪穴住居址　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
　第２節　掘立柱建物址　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
　第３節　土坑　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
　第４節　溝址　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
　第５節　ピット　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36

第Ⅳ章　まとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40

写真図版



第１図　上聖端遺跡Ⅵ位置図

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　調査にいたる経緯

長土呂遺跡群は、佐久市北部の長土呂地籍に所在する縄文時代から中世までの複合遺跡である。今回、遺跡内でIPDロジスティクス株式会社及び有限会社市川測量設計による倉庫新築工事が計画されたことにより、対象地7,858㎡について遺構の確認調査を実施した。その結果、対象地全域に古墳時代から平安時代までの住居址等が分布することが確認された。

保護協議の結果、倉庫建設範囲の1,820㎡について、遺構の記録保存を目的とした本調査を実施することとなった。

第２節　調査組織

調査主体者

佐久市教育委員会	教育長　棚澤　晴樹（～令和３年５月）　吉岡　道明（令和３年５月～）
事　務　局	
社会教育部長	三浦　一浩（令和２年度）　土屋　孝（令和３年度）
文化振興課長	東城　洋（令和２年度）　平林　照義（令和３年度）
文化振興課企画幹	岡部　政也（令和２年度）　谷津　和彦（令和３年度）
文化財調査係長	山本　秀典
文化財調査係	冨沢　一明　上原　学　羽毛田　卓也　小林眞寿　久保　浩一郎
調査担当者	久保　浩一郎
調　査　員	赤羽根　篤　赤羽根　充江　浅沼　勝男　大矢　志慕　桐原　久人　小島　真 清水　律子　田中　ひさ子　中澤　登　羽毛田　利明　比田井　久美子 舟田　和夫　堀篭　まゆみ　堀篭　保子　松本　仁宣　森泉　文恵　森泉　美由起 柳澤　孝子　横尾　敏雄　依田　好行

第３節　調査日誌

令和元年度	
11月７日	IPDロジスティクス株式会社より土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出を受理。
12月11日～13日	対象地内で遺構の確認調査を実施し、対象地全域で竪穴住居址等を確認する。
12月19日～	IPDロジスティクス株式会社に、確認調査の結果を通知し、保護協議を開始する。 保護協議の結果、対象地のうち工場建設範囲の1,820㎡について、遺構の記録保存を目的とした本調査を実施することとし、費用は対象地所有者である有限会社市川測量設計が負担することとなった。
令和２年度	
４月２日	有限会社市川測量設計と佐久市教育委員会により、埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結。

4月2日～6月8日	倉庫建設範囲1,820㎡について、記録保存のための本調査を実施する。
6月9日	佐久市文化財事務所において、記録及び出土遺物の整理作業を開始。
3月19日	令和2年度の整理作業を終了。
令和3年度	
4月22日	有限会社市川測量設計と佐久市教育委員会により、埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、遺物整理作業及び報告書作成を開始。
9月	発掘調査報告書を刊行し、業務を終了する。

第4節　遺構・遺物の概要

遺構	竪穴住居址20軒（古墳時代～平安時代）、掘立柱建物址4棟、土坑2基、溝址2条、ピット35基
遺物	縄文土器（早期）、弥生土器（後期）、土師器（古墳時代後期～平安時代）、須恵器（古墳時代後期～平安時代）、灰釉陶器、土製品（紡錘車、丸玉）、石器（石鏃、磨石、敲石、編物石）、石製品（臼玉、石製模造品）、鉄製品（鏃、鎌）

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第1節　地理的環境

佐久市は長野県の中央東端、四方を山地に囲まれた標高約700mの盆地内に位置し、北方には現在も噴煙を上げる浅間山を、南方には雄大な八ヶ岳連峰を望むことができる。

市内の地形を概観すると、浅間山南麓の浅間火山岩類及び浅間軽石流を基盤とする北側市街地域、鮮新世火山岩類を基盤とする東側山間地域、八ヶ岳火山岩類を基盤とする南側から西側にかけての山間地域、瓜生坂累層・布引累層などの湖沼堆積物を基盤とする北西側の御牧原・八重原台地、そしてこれらの中央を北流する千曲川により形成された沖積地などに大別される。

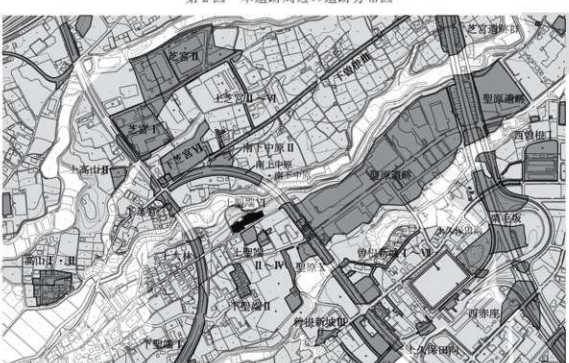
上聖端遺跡Ⅵは、佐久市北端部に位置する。遺跡周辺では、約13,000年前の火山堆積と考えられる浅間軽石流が基盤層となるが、この火山堆積物が濁川などの河川による浸食を受け、箱型の台地と谷が交互に連なる「田切り」地形が特徴的に発達している。本遺跡はこの「田切り」地形の台地部分に立地しており、調査区北側は比高差約10mを測る濁川の谷となる。

第2節　歴史的環境

本遺跡周辺は佐久市有数の遺跡密集地であり、北東から南西に延びる台地全体に遺跡群が形成され、田切りの谷によって区切られている（第2図）。遺跡周辺には上信越自動車道佐久インターチェンジ等が整備され、佐久市における交通の要所であることから、道路や商工業施設等の建設に伴う発掘調査が行われてきた。

現在の調査成果では、本遺跡周辺で縄文時代の集落は確認されていないが、縄文時代早期からの生活痕跡は確認され、本調査区でも早期の押型文土器が出土している。弥生時代後期には台地末端部で周防畑遺跡群、西近津遺跡群、枇杷阪遺跡群などに大規模な集落跡が形成される。当該期における地域の中核を成すような集落だった可能性も考えられる。古墳時代後期になると、本遺跡周辺にも集落

第 2 図　本遺跡周辺の遺跡分布図



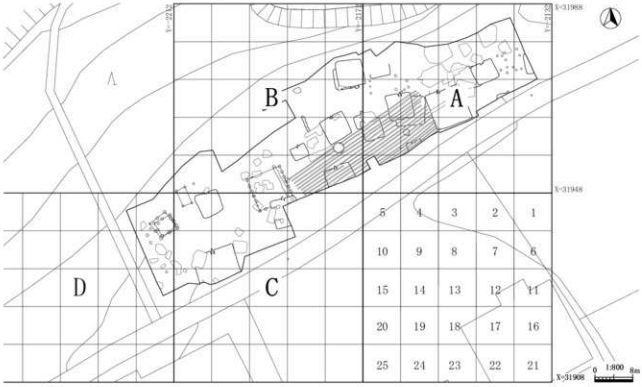
第 3 図　本遺跡周辺の発掘調査位置図

が形成される。本遺跡から隣接する聖原遺跡にかけて、また湯川を隔てた北側の芝宮遺跡群において、平安時代まで続く大規模な集落が出現する。聖原遺跡では奈良・平安時代を主体とする竪穴住居址が８００棟以上検出され、和同開珎などの皇朝十二銭や硯や腰帯金具、「伯万私印」の石製印などの希少な遺物が出土している。本遺跡周辺から北側には、小諸市・御代田町にかけて古代の大規模集落が分布しており、古代佐久郡において重要な地域であったと考えられている。中世になると遺跡数は減少するものの、本遺跡南側の岩村田地籍には大井城跡、近世には藤ケ城跡が築かれ、今日の佐久市中心市街地の礎となった。

第３節　発掘調査の方法と基本層序

調査区内の表土を遺構検出面まで重機により掘削した。対象地は過去の耕作等により地山ローム層まで撹乱され、遺構構築面は削平されている状態であった。よって遺構検出面は地山上面である。表土除去後、調査区内に国土地理院の平面直角座標系原点第Ⅷ系を基点とするグリッド杭を打設した。杭は調査区北東の X=31988、Y=-2132 を起点として 8m 間隔で打設し、アルファベット名を付した 40m 四方の大グリッドと、大グリッド内を 25 等分して数字名を付した 8m 四方の小グリッドの組合せによりグリッド名とした（北東から A-1 グリッド）。グリッド設定後、各遺構を人力で掘下げ、土層観察用の畔による遺構断面図の作成、グリッド杭を用いた簡易遺方測量による遺構平面図の作成を行うとともに、デジタル一眼レフカメラ（LAW・JPEG）と 35 ㎜一眼レフカメラ（カラーリバーサル）により遺構の記録写真撮影を行った。出土遺物は、遺構ごと或いはグリッド単位で取り上げた。

現場での作業修了後は、佐久市教育委員会文化振興課文化財事務所で記録及び出土遺物の整理作業を行った。本書の作成については、Adobe 社の Illustrator、Photoshop、Indesign を用いて編集、執筆した。



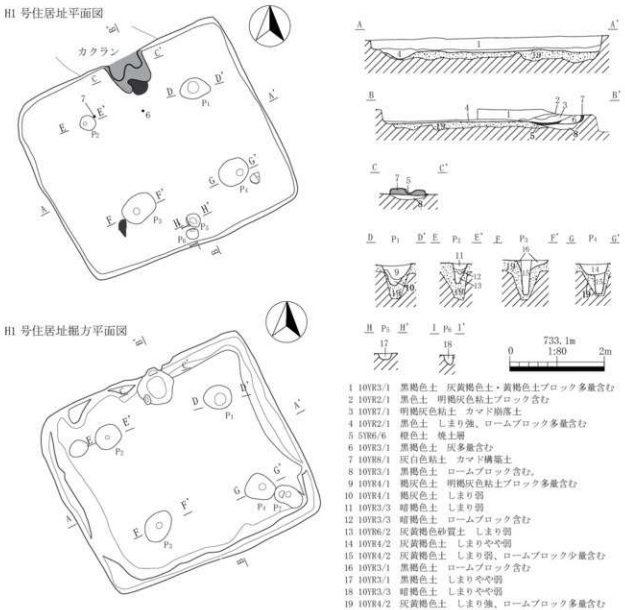
第４図　上聖端遺跡Ⅵグリッド配置図

第Ⅲ章　遺構と遺物

第１節　竪穴住居址

H1 号住居址（第５・６図）

A-7 グリッドに位置し、H3 号住居址より新しい。長軸 4.83m、短軸 4.14m、床面積 19.9 ㎡を測るやや東西に長い方形を呈する。検出面から床面までの深さは 0.34m、主軸は W-25°－N である。住居床面は硬質で、ピットは６基検出され、P_1 ～ P_4 が柱穴、P_5・P_6 が入口施設と考えられる。カマドは北側中央に位置し、灰白色粘土により構築される。貼床は６㎝～ 20 ㎝程度の厚さが確認でき、掘方は周



1 10YR3/1　黒褐色土　灰黄褐色土・黄褐色土ブロック多量含む
2 10YR2/1　黒色土　明褐灰色粘土ブロック含む
3 10YR7/1　明褐灰色粘土　カマド崩落土
4 10YR2/1　黒色土　しまり強、ロームブロック多量含む
5 5YR6/6　橙色土　焼土層
6 10YR3/1　黒褐色土　灰多量含む
7 10YR8/1　灰白色粘土　カマド構築土
8 10YR3/1　黒褐色土　ロームブロック含む。
9 10YR4/1　褐灰色土　明褐灰色粘土ブロック多量含む
10 10YR4/1　褐灰色土　しまり弱
11 10YR3/3　暗褐色土　しまり弱
12 10YR3/3　暗褐色土　ロームブロック含む
13 10YR6/2　灰黄褐色砂質土　しまり弱
14 10YR4/2　灰黄褐色土　しまりやや弱
15 10YR4/2　灰黄褐色土　しまり弱、ロームブロック少量含む
16 10YR3/1　黒褐色土　ロームブロック含む
17 10YR3/1　黒褐色土　しまりやや弱
18 10YR3/3　暗褐色土　しまりやや弱
19 10YR4/2　灰黄褐色土　しまり強、ロームブロック多量含む

第５図　H1 号住居址遺構図

囲が段状に掘り残される形状である。掘方ではピット1基が検出された。

遺物は土師器・須恵器等が出土した。1～7は土師器で、1・2は坏、3は小型の鉢だろうか。4は甕、5～7は壺である。6・7はカマド近くの床面上で出土した。8～11は須恵器で、8は坏、9・10は蓋、11は壺である。12・13は磨石である。

羽釜が出土したH3号住居址より新しいことから、本址は8世紀後半以降の所産と考えられる。

H2号住居址（第7図）

A-6グリッドに位置する。東側が調査区外に延びるため全容は不明だが、検出範囲で南北5.04m以上、東西1.76m以上を測る。検出面から床面までの深さは0.39m、主軸はW-14°－Nである。住居床面はやや硬質で、柱穴と考えられるピット1基が検出された。貼床は3㎝～30㎝程度の厚さが確認で、掘方は中央部を高く残し、外周部が深くなる形状である。

遺物は土師器と須恵器が出土した。1・2は土師器で、1には内面に黒色処理が施される。3～6は須恵器で、3が蓋、4・5は坏、6は壺である。これらの出土遺物から、本址は8世紀以降の所産と考えられる。

H3号住居址（第8図）

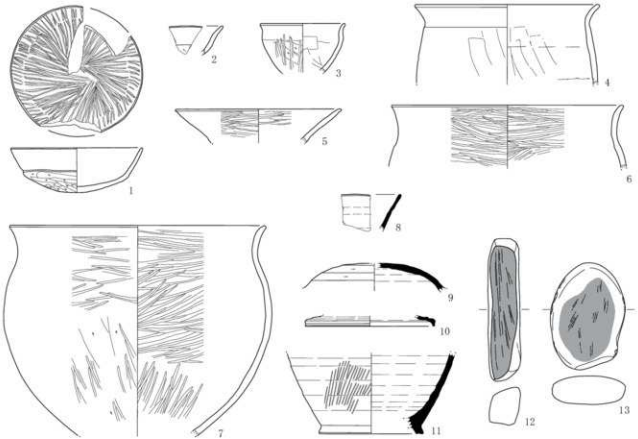
A-8グリッドに位置し、H1号住居址より古く、H8号住居址より新しい。南北両側に撹乱を受けるため全容は不明だが、推定で長軸5.39m、短軸4.63m、床面積24.38㎡を測る。東西に長い長方形を呈すると考えられる。検出面から床面までの深さは0.22m、主軸はW-14°－Nである。住居床面は硬質で、ピットは3基検出され、いずれも柱穴と考えられる。カマドは北側中央に位置するが、わずかな焼土と東側の袖部が遺存するのみであった。貼床は5㎝～12㎝の厚さが確認できる。

遺物は土師器・須恵器などが出土した。1・2は土師器の羽釜で、床面上とP3から出土した。2・3は須恵器の坏、5は砥石、6は鉄製の長頸鏃である。出土遺物から、本址は8世紀後半の所産と考えられる。

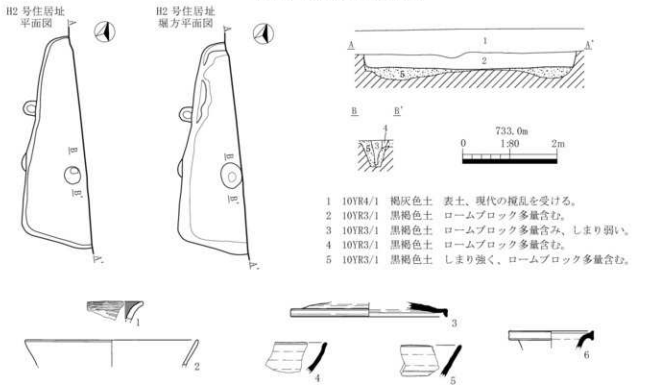
H4号住居址（第9～12図）

A-13グリッドに位置し、H8号住居址より新しい。北東角を撹乱に破壊されるが、平面形は方形で、南北7.61m、東西7.72m、床面積51.02㎡を測る。検出面から床面までの深さは0.53m、主軸はW-20°－Nである。住居床面は硬質で、ピットが9基検出され、P1～P4が柱穴と考えられる。南側のP3・P4周辺からは角礫が検出されたが、礫は床面より上で検出されている。南側中央のP7・P8・P10は入口施設と考えられる。カマドは北側のやや西寄りに位置し、灰白色の良質な粘土と扁平礫により構築されている。貼床は4～27㎝の厚さで、掘方は中央部が浅く、外周部が深い形状である。掘方では12基のピットが検出された。四方の柱穴P1～P4の内側と外側にピットが位置することから、住居の建替えが行われた結果と考えられる。北側中央には、壁面から北側に張出すように、被熱して硬化した灰白色粘土が残り、建替える際にカマドも作り替えたと考えられる。

遺物は土師器などが出土した。1～14は土師器である。1～3は坏で、1はロクロ成形で底部に回転糸切痕を留める。2・3はヘラケズリが施された丸みのある底部から段をもって立ちあがり、内面には黒色処理が施される。2・3は住居北側の床面から出土した。4は高坏で、内外面とも丁寧にヘラミガキがされ、内面は黒色処理が施される。カマド東側床面に正位で置かれた状態で出土した。5～8は甕である。外面の調整方法に違いがみられ、5はヘラケズリ、6はハケによる調整、7はヘラミガキが施される。5はカマド西側の床面に胴部上半以上が正位に置かれた状態で、7はカマド前の床面から潰れた状態で出土した。8は台付甕の台部と考えられる。9～14は壺である。いずれも球形の胴部で

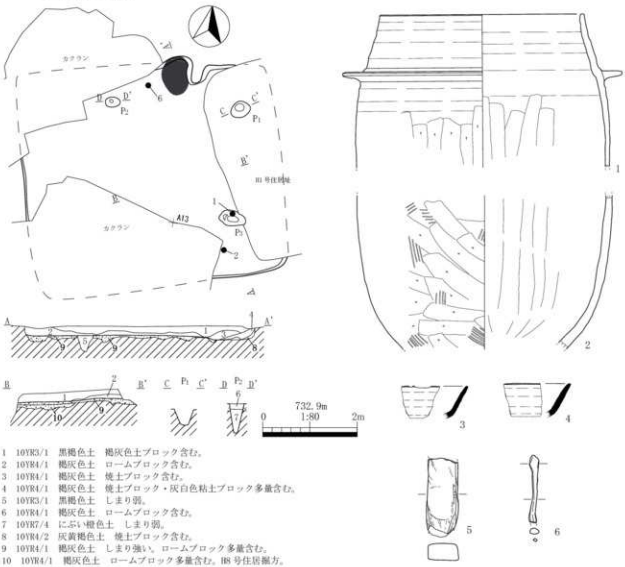


第 6 図　H1 号住居址遺物図



第 7 図　H2 号住居址遺構図・遺物図

H3 号住居址平面図



1　10YR3/1　黒褐色土　褐灰色土ブロック含む。
2　10YR4/1　褐灰色土　ロームブロック含む。
3　10YR4/1　褐灰色土　焼土ブロック含む。
4　10YR4/1　褐灰色土　焼土ブロック・灰白色粘土ブロック多量含む。
5　10YR3/1　黒褐色土　しまり弱。
6　10YR4/1　褐灰色土　ロームブロック含む。
7　10YR7/4　にぶい橙色土　しまり弱。
8　10YR4/2　灰黄褐色土　焼土ブロック含む。
9　10YR4/1　褐灰色土　しまり強い、ロームブロック多量含む。
10　10YR4/1　褐灰色土　ロームブロック多量含む。H8 号住居掘方。

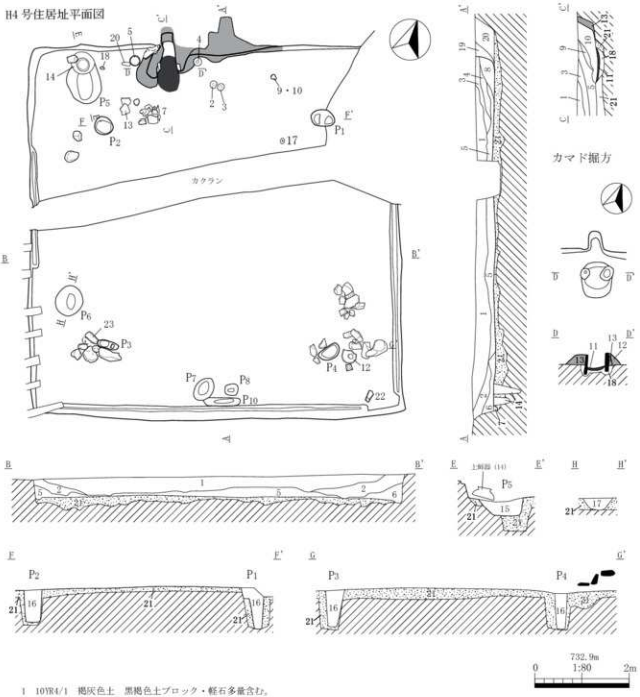
第 8 図　H3 号住居址遺構図・遺物図

頸部が括れ、口縁部が広がる形態である。9・10・13 は住居内北側の床面から、12 は P4 横の床面から出土した。14 は大型の壺だが、住居内北西の壁際に、胴部下半を欠いたまま正位に置かれた状態で出土した。15 は土製の紡錘車である。16 は滑石製の臼玉である。17 ～ 23 は石器で、17 は凹石、18・19 は敲石、20 は軽石製の支脚、21 は磨石、22・23 は砥石である。

出土遺物から、本址は 6 世紀後半～ 7 世紀の所産と考えられる。1 の土師器坏のみやや新しい特徴を有するが、住居址埋土への混入品と考えられる。

H5 号住居址（第 13 図）

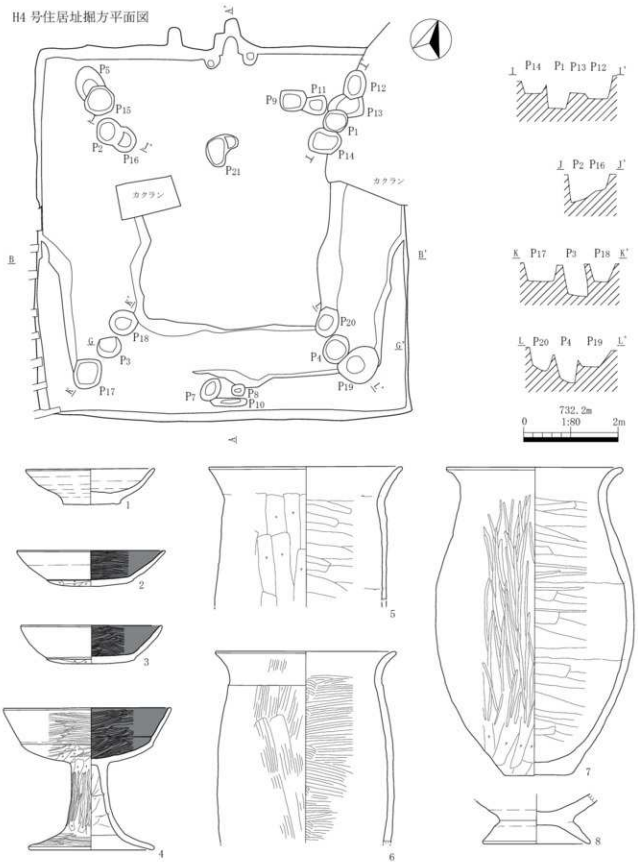
A-12 グリッドに位置する。住居址北西部分だけの検出であるため全容は不明だが、検出範囲で南北 0.64m、東西 3.45m を測る。検出面から床面までの深さは 0.34m である。住居床面は硬質で、ピットは検出されなかった。カマドは北側中央に位置し、粘質土で構築されている。貼床は 8 cm～ 31 cmの厚さが確認できる。遺物は土師器片等が出土したが、実測し得る遺物は出土しなかった。



1　10YR4/1　褐灰色土　黒褐色土ブロック・軽石多量含む。
2　10YR4/2　灰黄褐色土　黒褐色土ブロック・軽石含む。
3　10YR6/1　褐灰色粘土　黒褐色土ブロック・軽石多量含む。
4　10YR3/1　黒褐色土　黄褐色土ブロック含む。
5　10YR4/2　灰黄褐色土　黒褐色土ブロック少量含む。
6　10YR3/1　黒褐色土　ロームブロック少量含む。
7　10Yr3/2　黒褐色土　ロームブロック含む。しまり弱。
8　10YR4/2　灰黄褐色土　灰白色粘土ブロック含む。
9　10YR3/1　黒褐色土　灰白色粘土ブロック多量含む。
10　10YR8/1　灰白色粘土　黒褐色土含む。
11　5YR6/8　橙色土　焼土。
12　10YR3/1　黒褐色粘土　しまり強。カマド構築土。
13　10YR8/1　灰白色粘土　しまり強。カマド構築土。
14　10YR5/1　褐灰色土　黒褐色土・ロームブロック多量含む。
15　10YR3/3　暗褐色土　しまり弱。黒褐色土ブロック含む。
16　10YR4/2　灰黄褐色土　しまり弱。黒褐色土・ロームブロック多量含む。
17　10YR3/3　暗褐色土　しまり弱。ロームブロック含む。
18　10YR5/1　褐灰色土　しまりやや弱。灰・炭化物含む。カマド掘方。
19　10YR5/2　灰黄褐色粘土　灰白色粘土多量含む。旧カマド。
20　10YR8/1　灰白色粘土　しまり強。旧カマド構築土。
21　10YR4/1　褐灰色土　貼床。にぶい橙色砂質土ブロック多量含む。

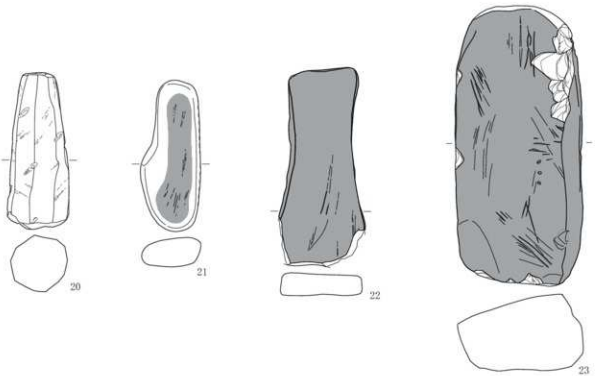
第９図　H4 号住居址遺構図１

H4 号住居址掘方平面図



第 10 図　H4 号住居址遺構図 2・遺物図 1

第 11 図　H4 号住居址遺物図 2



第12図　H4号住居址遺物図2

H6号住居址（第14図）

A-19グリッドに位置する。住居址北側だけの検出であるため全容は不明だが、検出範囲で南北1.58m、東西3.18mを測る。北東から南西に延びる畝状の攪乱により一部が破壊される。検出面から床面までの深さは0.18mである。住居床面はやや硬質で、ピットは検出されなかった。カマドは北側中央に位置し、粘土と角礫により構築されている。カマド中央に、2個の支脚石（4・5）が置かれていた。貼床は4㎝～17㎝の厚さが確認できる。

遺物は土師器・須恵器などが出土した。1は土師器の坏で、丸みのある底部にヘラケズリが施される。2は土師器の甕、3は須恵器の坏である。4・5はカマド中央から出土した支脚石である。本址は、出土遺物から8世紀以降の所産と考えたい。

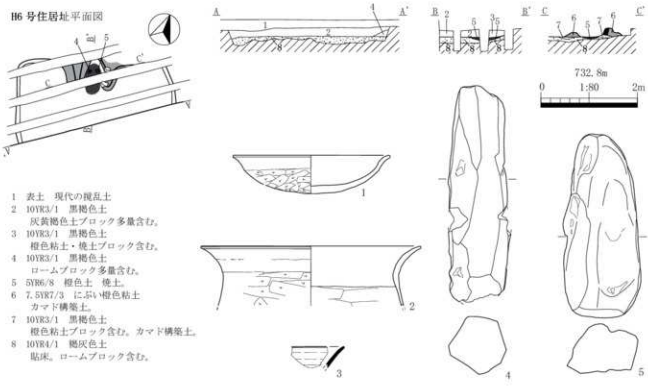
H7号住居址（第15・16図）

A-14・15グリッドに位置し、H13号住居址より新しい。全体に畝状の攪乱を受けるが、平面形は方形で、長軸5.34m、短軸5.06m、床面積27.02㎡を測る。検出面から床面までの深さは0.35mで、主軸はW-9°-Nである。住居床面は硬質で、5基のピットが検出された。P_1～P_4が柱穴と考えられる。カマドは北側中央に位置し、地山を削り出した上に粘土と角礫で構築している。貼床は9㎝～22㎝の厚さが確認でき、掘方ではピット1基が検出された。

遺物は土師器などが出土した。1～15は土師器である。1～6は坏で、1・4～6は内面に黒色処理が施される。7は高坏で、内面に黒色処理が施される。8は内外面ともヘラミガキが施される鉢あるいは壺だろうか、住居床面から出土している。9・10は壺である。11～15は甕である。いずれも内面はヘラ状工具によるナデ、外面はヘラケズリが施されるが、12は内面にハケによる調整が認められる。16は土製の丸玉である。17は磨石である。18・19は鉄製品で、18は鎌の刃先と考えられる。19は長頸鏃で、頸部が折れ、茎部を欠損する。本址は、出土遺物から7世紀の所産と考えられる。

1　表土　現代の攪乱土
2　10YR4/2　灰黄褐色土　ロームブロック含む。
3　5YR6/6　橙色土　焼土。
4　10YR4/1　褐灰色粘質土　黄橙色粘土含む。カマド構築土。
5　10YR4/1　褐灰色土　貼床。ロームブロック含む。

第 13 図　H5 号住居址遺構図



1　表土　現代の攪乱土
2　10YR3/1　黒褐色土
　灰黄褐色土ブロック多量含む。
3　10YR3/1　黒褐色土
　橙色粘土・焼土ブロック含む。
4　10YR3/1　黒褐色土
　ロームブロック多量含む。
5　5YR6/8　橙色土　焼土。
6　7.5YR7/3　にぶい橙色粘土
　カマド構築土。
7　10YR3/1　黒褐色土
　橙色粘土ブロック含む。カマド構築土。
8　10YR4/1　褐灰色土
　貼床。ロームブロック含む。

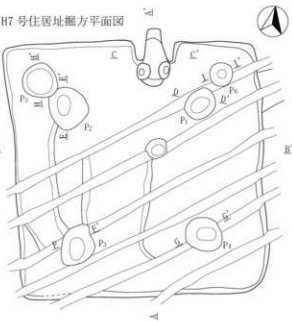
第 14 図　H6 号住居址遺構図・遺物図

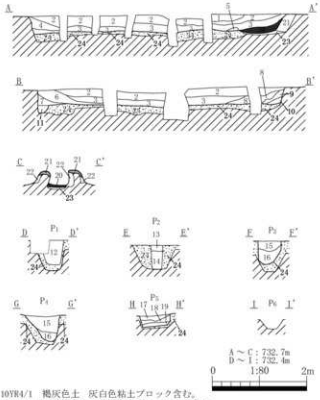
H8 号住居址（第 17 図）

A-8・13 グリッドに位置し、H3・H4 号住居址より古い。東側を H3 号住居址に、南北両側を攪乱により破壊され、住居址西側壁の一部が遺存するのみだったため、ほぼ掘方のみ残る状態であった。P1・P2 が柱穴と考えられ、東西 4.5m 程度の規模と推定できる。カマドの有無は確認できなかった。遺物は出土いないが、H4 号住居址より古いことから 7 世紀以前に位置づけられる。

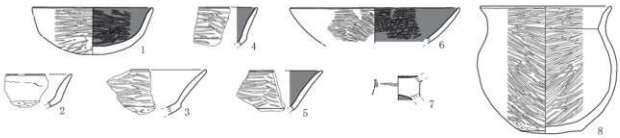
H7 号住居址平面図

H7 号住居址掘方平面図

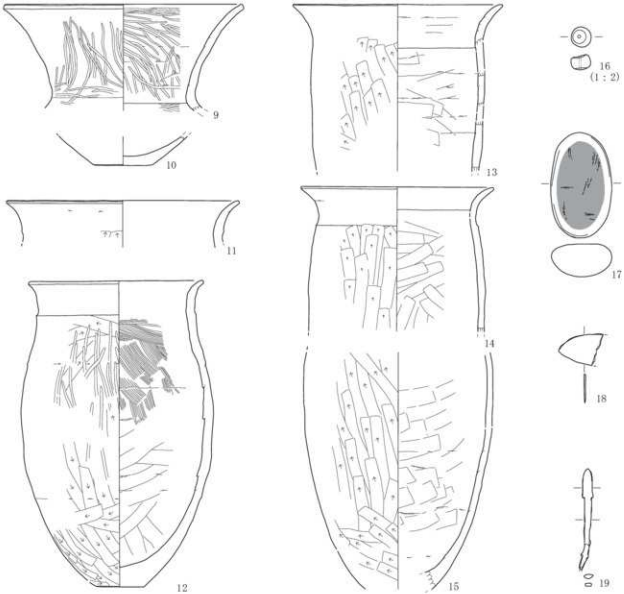




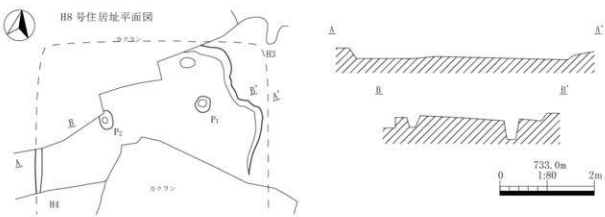
1　10YR4/1　褐灰色土　灰白色粘土ブロック含む。
2　10YR4/2　灰黄褐色土　黄褐色土ブロック少量含む。
3　10YR3/3　暗褐色土　黒褐色土ブロック含む。
4　10YR4/2　灰黄褐色土　黄褐色土ブロック多量含む。
5　5YR6/6　橙色粘土　焼土ブロック含む。
6　10YR6/4　にぶい橙色土　黒褐色土ブロック含む。
7　10YR3/1　黒褐色土　黄褐色土ブロック含む。
8　10YR4/2　灰黄褐色土　ローム土ブロック多量含む。
9　10YR3/1　黒褐色土　黄褐色土ブロック含む。
10　10YR4/2　灰黄褐色土　ロームブロック少量含む。
11　10YR3/1　黒褐色土　しまり弱。
12　10YR3/1　黒褐色土　ロームブロック多量含む。
13　10YR4/1　褐灰色土　ロームブロック多量含む。
14　10YR3/1　黒褐色土　ロームブロック少量含む。
15　10YR4/1　褐灰色土　ロームブロック少量含む。
16　10YR4/2　灰黄褐色土　ロームブロック含む。
17　10YR3/1　黒褐色土　焼土ブロック含む。
18　10YR4/1　褐灰色土　焼土ブロック少量含む。
19　10YR4/2　灰黄褐色土　ロームブロック少量含む。
20　7.5YR7/6　橙色土　焼土。
21　N8/8　　灰白色粘土　しまり強。カマド構築土。
22　7.5YR6/2　灰褐色土　しまり強。粘土ブロック含む。カマド構築土。
23　10YR3/1　黒褐色土　しまり弱。ロームブロック含む。
24　10YR4/1　褐灰色土　貼床。ロームブロック多量含む。



第 15 図　H7 号住居址遺構図・遺物図 1



第 16 図　H7 号住居址遺物図 2

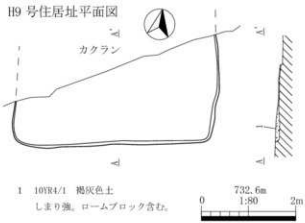


第 17 図　H8 号住居址遺構図

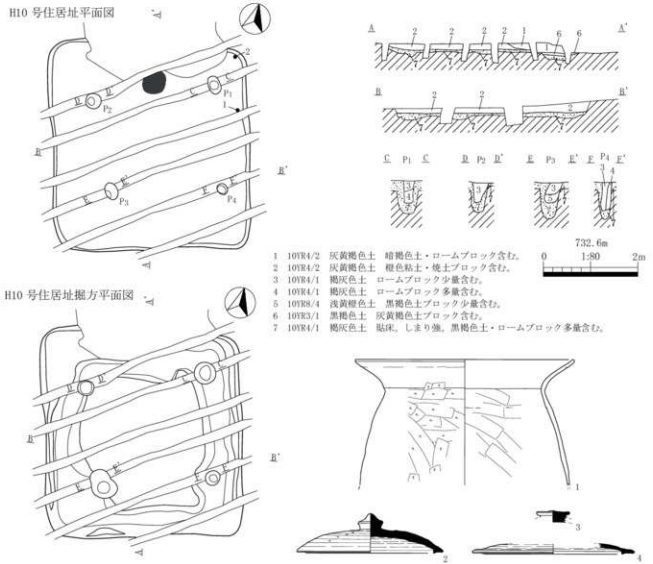
H9 号住居址（第 18 図）

A-10 グリッドに位置する。全体が削平されているため、住居址南側の掘方のみが遺存する状況である。検出範囲では南北 2.16m 以上、東西 4.17m を測り、主軸は W - 10° - N である。床面は削平されているが、掘方で 8 cm以上の厚さの貼床があったことがわかる。ピットやカマドは検出されなかった。

遺物が出土していないため帰属時期は不明である。



第 18 図　H9 号住居址遺構図



第 19 図　H10 号住居址遺構図・遺物図

H10 号住居址（第 19 図）

A-20 グリッドに位置し、H15 号住居址より新しい。全体に畝状の撹乱を受け、北側中央は撹乱に破壊される。南北にわずかに長い方形を呈し、長軸 4.42m、短軸 4.00m、面積 17.68 ㎡を測る。検出面から床面までの深さは 0.21m で、主軸は W－16°－N である。カマドは北側中央に位置していたと考えられ、焼土のみ検出された。床面は硬質で、ピット 4 基が検出され、いずれも柱穴と考えられる。貼床は 4 ㎝～ 14 ㎝の厚さが確認でき、掘方は住居址中央と北側が段状に高くなり、外周部が深く掘られる形状である。

遺物は土師器と須恵器が出土した。1 は土師器の甕である。2 ～ 3 は須恵器の蓋で、宝珠型のつまみで内面にかえりをもつ。2 は住居址北東角の床面から出土している。出土遺物から本址は 8 世紀前半の所産と考えられる。

H11 号住居址（第 20 図）

B-21 グリッドに位置し、南側が調査区外に延びる。全体に畝状の撹乱を受ける。検出範囲で南北 3.40m、東西 5.75m を測る。検出面から床面までの深さは 0.41m で、主軸は W－20°－N である。カマドは北側中央に位置し、袖部分を地山で削り出した上に、灰白色の良質な粘土と角礫で構築される。床面はカマド周辺の一部のみ硬質で、壁際は軟質である。貼床は 5 ㎝～ 37 ㎝の厚さが確認でき、掘方は外周部が深く掘られる形状である。掘方で柱穴と考えられるピット 2 基が確認できた。

遺物は土師器などが出土した。1 は弥生土器の甕の頸部である。2 ～ 9 は土師器である。2 ～ 5 は坏で、内面に黒色処理が施される。半球状のもの、口縁部が外販するものがある。6 は鉢で、内面に黒色処理が施される。7・8 は甕である。9 は壺である。10 は編物石と考えられ、両側辺に加工される。11 は黒曜石の剥片に二次加工が施される。

出土遺物から、本址は 7 世紀の所産と考えられる。

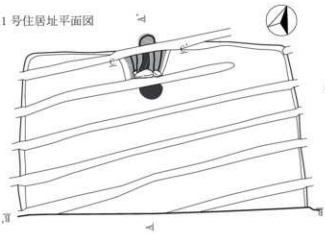
H12 号住居址（第 21・22 図）

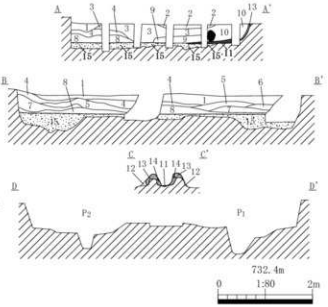
B-16 グリッドに位置する。方形を呈し、南北 5.19m、東西 5.18m、床面積 26.88 ㎡を測る。検出面から床面までの深さは 0.33m で、主軸は W－27°－N である。カマドは北側中央に位置し、袖部分を地山で削り出した上に灰白色の良質な粘土で構築され、煙道が北側に張り出さない形態である。住居址中央から南側で、焼土・炭化物層（4 層）が検出された。床面より上の堆積であるため、住居廃絶後の埋没過程で堆積したものと考えられる。住居床面は硬質で、5 基のピットが検出された。P1 ～ P4 が柱穴と考えられる。P3 付近では床面から角礫が検出されている。貼床は 8 ㎝～ 46 ㎝の厚さが確認でき、掘方は中央が浅く、外周部が深く掘られる形状である。掘方ではピット 3 基が確認された。

遺物は土師器・須恵器などが出土した。1 ～ 18 は土師器である。1 ～ 4 は坏で、1 ～ 3 は丸底から体部の稜をもって直線的に立上り、内面黒色処理が施される。4 は平底で、外面底部までミガキが施される。内面には本来黒色処理が施されていた可能性がある。6・7 は高坏で、内面に黒色処理が施される。8 ～ 17 は甕である。8・9 は器高が低く、胴部最大径と口径が同程度となる。10 ～ 17 は長胴の甕で、胴部中程から下半に最大径をもつ。外面調整はヘラケズリのものが主体で、12 はハケによる調整、13 はヘラミガキが施される。18 は甑の底部である。19・20 は須恵器の坏で、やや内傾する立上りをもつ。21 ～ 29 は石器で、21 は凹石、22 ～ 29 は編物石である。30 は鉄製の鎌である。

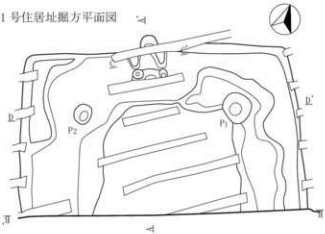
本址は出土遺物から 6 世紀後半の所産と考えられる。

H11 号住居址平面図

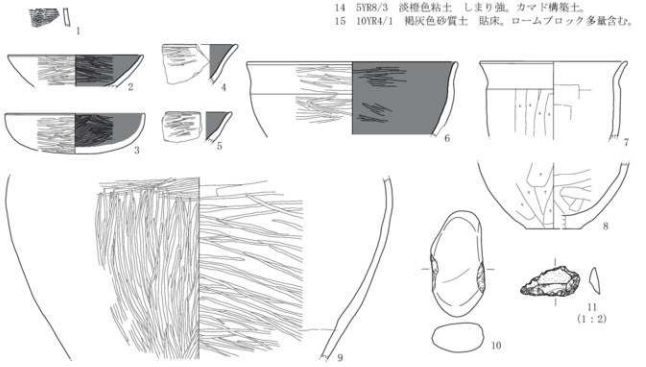




H11 号住居址掘方平面図

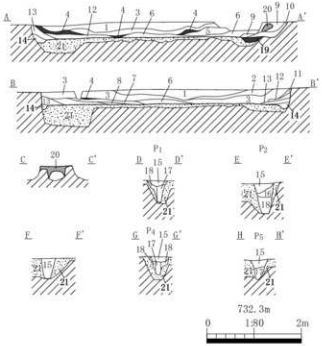


1　10YR3/3　暗褐色土　ロームブロック多量含む。
2　10YR4/1　褐灰色土　灰白色粘土ブロック含む。
3　10YR3/3　暗褐色土　ロームブロック含む。
4　10YR3/1　黒褐色土　ロームブロック少量含む。
5　10YR3/3　暗褐色土　ロームブロック多量含む。
6　10YR3/1　黒褐色砂質土　ロームブロック少量含む。
7　10YR4/1　褐灰色砂質土　ロームブロック少量含む。
8　10YR4/2　灰黄褐色土　ロームブロック少量含む。
9　5YR8/2　灰白色粘土　灰黄褐色土含む。
10　10YR4/2　灰黄褐色土　灰白色粘土ブロック・焼土含む。
11　5YR7/3　にぶい橙色土　焼土。
12　10YR4/1　褐灰色土　しまり強い。カマド構築土。
13　5YR8/1　灰白色粘土　しまり強。カマド構築土。
14　5YR8/3　淡橙色粘土　しまり強。カマド構築土。
15　10YR4/1　褐灰色砂質土　貼床。ロームブロック多量含む。



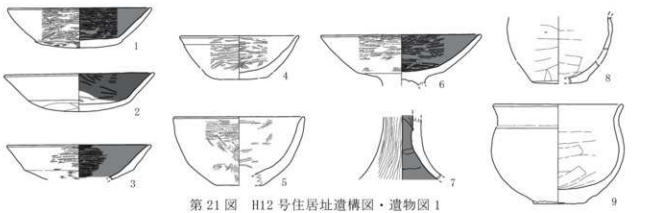
第 20 図　H11 号住居址遺構図・遺物図

H12 号住居址平面図

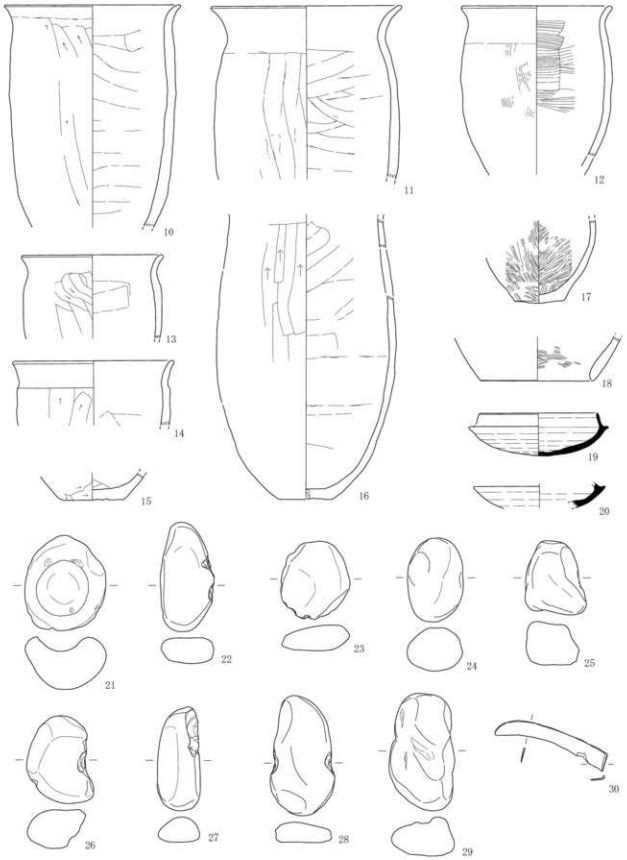


H12 号住居址脈方平面図

1　10YR5/3　にぶい黄褐色土　炭化物少量含む。
2　10YR4/1　褐灰色土　炭化物少量含む。
3　10YR6/3　にぶい褐色土　炭化物・ロームブロック少量含む。
4　10YR4/1　褐灰色土　橙色土ブロックや炭化物多量含む。
5　10YR5/2　灰黄褐色土　ロームブロック少量・炭化物多量含む。
6　10YR6/4　にぶい黄橙色土　焼土・炭化物少量含む。
7　10YR4/1　褐灰色土　橙色土ブロック多量含む。
8　10YR5/3　にぶい黄褐色土　ロームブロック少量含む。
9　10YR4/2　灰黄褐色土　炭化物・灰白色粘土ブロック含む。
10　10YR4/2　灰黄褐色土　灰多量含む。焼土ブロック含む。
11　10YR4/1　褐灰色土　ロームブロック少量含む。
12　10YR6/2　灰黄褐色土　褐灰色土ブロック含む。
13　10YR3/1　黒褐色土　ロームブロック少量含む。
14　10YR6/2　灰黄褐色土　ロームブロック少量含む。
15　10YR4/2　灰黄褐色土　黒褐色土ブロック含む。
16　10YR3/1　黒褐色土　黄橙色土ブロック含む。
17　10YR4/2　灰黄褐色土　しまり弱。柱痕。
18　10YR4/2　灰黄褐色土　ロームブロック多量含む。
19　7.5YR7/6　橙色シルト質土　焼土・灰層。
20　10YR8/1　灰白色粘土　表面被熱。カマド構築土。
21　10YR4/1　褐灰色土　黒褐色土・ロームブロック多量含む。



第 21 図　H12 号住居址遺構図・遺物図 1



第 22 図　H12 号住居址遺物図 2

H13 号住居址（第 23・24 図）

A-14 グリッドに位置し、H7 号住居址より古い。北西部を H7 号住居址に壊され、全体に畝状の攪乱を受ける。方形を呈すると考えられ、南北 5.95m、東西 5.93m、床面積は推定 35.28 ㎡を測る。検出面から床面までの深さは 0.33m で、主軸は W－3°－N である。カマドは H7 号住居址に壊される。住居床面は硬質で、3 基のピット（P_1・P_3・P_4）が検出された。H7 号住居址掘方で検出された P_2 を加えた P_1～P_4 が柱穴と考えられる。住居址南側床面では礫が出土した。貼床は 6 ㎝～ 24 ㎝の厚さが確認でき、掘方は中央が浅く、外周部が深く掘られる形状である。掘方ではピット 1 基が確認された。

遺物は土師器・須恵器などが出土した。1 は縄文土器の深鉢の口縁部である。早期の押型文土器と考えられ、楕円文が施される。2 ～ 17 は土師器である。2 ～ 5 は坏で、1・2 は丸底から体部の稜をもって立上り、4 は半球状を呈する。5 は須恵器坏身を模したもので、内面には放射状の暗文が施される。6 は鉢で、内面に黒色処理が施される。7 ～ 14 は甕、15 ～ 17 は壺である。18 は須恵器の蓋である。19 は黒曜石製の石鏃である。20・21 は磨石である。20 は端部の使用面に赤色顔料とみられる付着物が認められる。22 ～ 37 は編物石と考えられ、住居址南東部の床面からまとまって出土した。

本址は出土遺物から 7 世紀の所産と考えられる。

H14 号住居址（第 25・26 図）

B-6 グリッドに位置し、H18 号住居址より新しい。上部を削平されるが、方形を呈し、南北 5.44m、東西 5.55m、床面積 30.19 ㎡を測る。検出面から床面までの深さは 0.08m で、主軸は W－10°－N である。カマドは削平され残っていないが、地山ローム層が被熱していることと、カマドを造り出すためと考えられる掘方が認められることから、北側中央にカマドがあったと考えられる。床面は硬質で、ピットが 4 基検出された。いずれも柱穴と考えられる。貼床は住居址外周部のみ 27 ㎝の厚さで確認でき、中央部は地山ローム層を床面とする。掘方はカマド部分と中央を残して外周部が深く掘られる形状である。掘方ではピット 3 基が検出された。

遺物は土師器・須恵器などが出土した。1 ～ 3 は土師器である。1 は鉢で、内面黒色処理が施される。2・3 は甕である。4・5 は須恵器で、4 は坏、5 は有台坏である。6 は灰釉陶器の碗である。7 は磨石、8 ～ 14 は編物石と考えられる。15 は滑石製の石製模造品である。住居址北東側の埋土より出土した。

本址は、出土遺物から 9 世紀の所産と考えられる。

H15 号住居址（第 27 図）

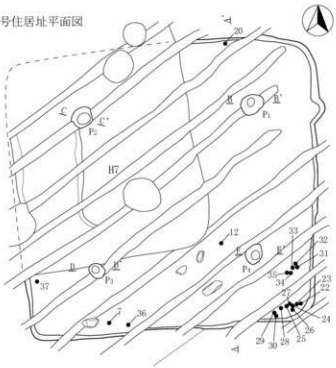
B-11・16 グリッドに位置し、H10 号住居址より古い。東側が攪乱を受け破壊されるため全容は不明だが、南北 3.43m、東西 2.18m を測る。検出面から床面までの深さは 0.19m で、主軸は W－16°－N である。カマドは北側中央に位置するが、煙道部が遺存するのみで構造は不明である。床面は硬質で、3 ㎝～ 8 ㎝の貼床が認められる。掘方は外周部分が深く掘られる形状であり、掘方からピット 1 基が検出された。遺物は土師器の甕が出土した。

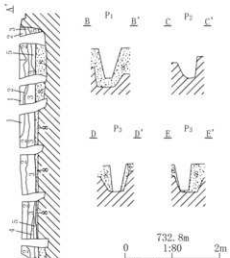
本址は H10 号住居址との新旧関係から 8 世紀前半に位置付けたい。

H16 号住居址（第 28 図）

B-17 グリッドに位置する。東西に長い長方形を呈し、長軸 3.24m、短軸 2.55m、床面積 8.26 ㎡を測る。検出面から床面までの深さは 0.20m で、主軸は W－27°－N である。カマドは北側中央に位置し、地山ローム層を削り出した袖部の上に、灰白色の良質な粘土を用いて構築される。床面は硬質で、北寄りに 2 基のピットが検出され、いずれも柱穴と考えられる。貼床は 2 ㎝～ 15 ㎝の厚さで認められ、掘

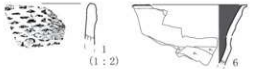
H13 号住居址平面図

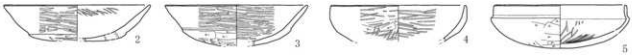




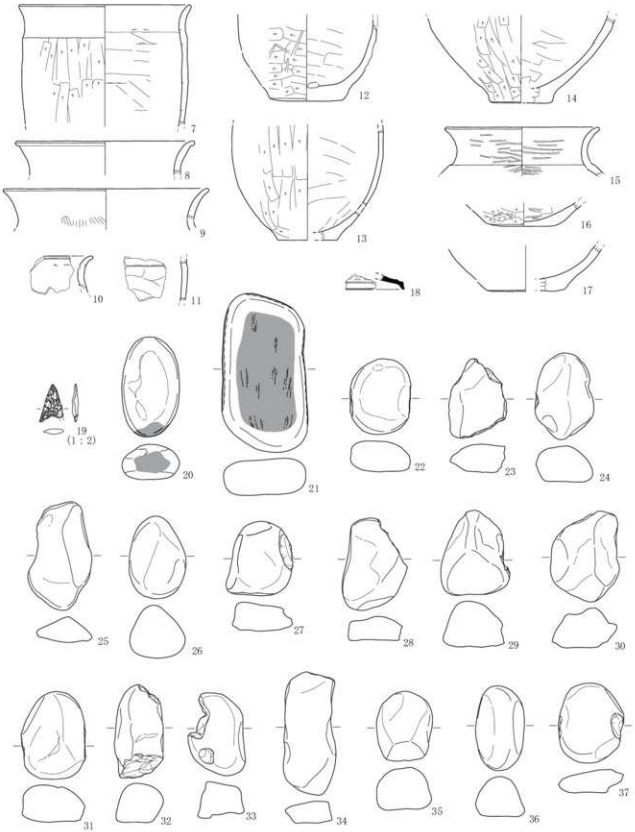
H13 号住居址掘方平面図

1　10YR4/1　褐灰色土　灰黄褐色土ブロック含む。
2　10YR4/1　褐灰色土　黒色土ブロック多量含む。
3　10YR4/2　灰黄褐色土
　　黒褐色土・ロームブロック少量含む。
4　10YR4/2　灰黄褐色土　ロームブロック少量含む。
5　10YR3/1　黒褐色土　ロームブロック少量含む。
6　10YR4/1　褐灰色土　ロームブロック多量含む。
7　10YR3/1　黒褐色土　ロームブロック多量含む。
8　10YR3/1　黒褐色土　貼床。
　　灰黄褐色土・ロームブロック多量含む。



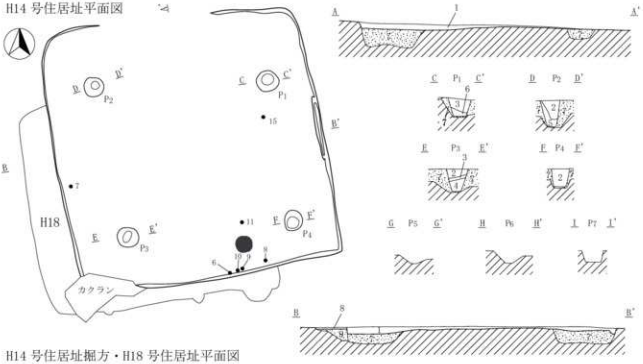


第 23 図　H13 号住居址遺構図・遺物図 1

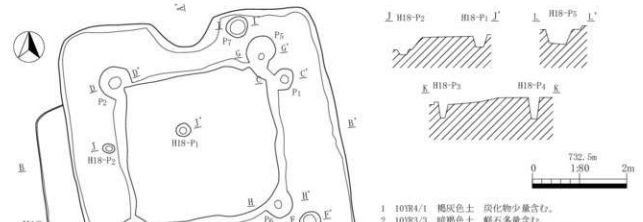


第 24 図　H13 号住居址遺物図 2

H14 号住居址平面図



H14 号住居址掘方・H18 号住居址平面図

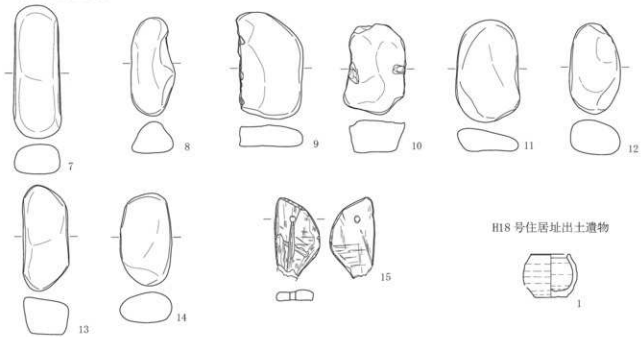


1	10YR4/1	褐灰色土	炭化物少量含む。
2	10YR3/3	暗褐色土	軽石多量含む。
3	10YR3/3	暗褐色土	ロームブロック多量含む。
4	10YR3/1	黒褐色土	ロームブロック少量含む。
5	10YR3/1	黒褐色土	ロームブロック多量含む。
6	10YR4/2	灰黄褐色砂質土	ロームブロック少量含む。
7	10YR3/1	黒褐色土	貼床。ロームブロック多量含む。
8	10YR4/1	褐灰色土	ロームブロック少量含む。
9	10YR4/1	褐灰色土	H18 貼床。ロームブロック多量含む。

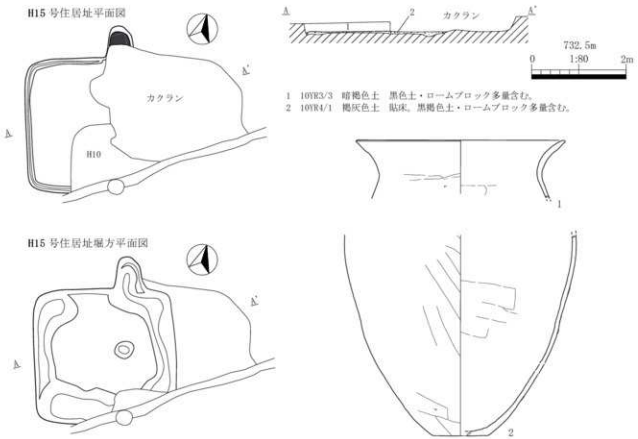
H14 号住居址出土遺物

第 25 図　H14 号・18 号住居址遺構図・遺物図 1

H14 号住居址出土遺物

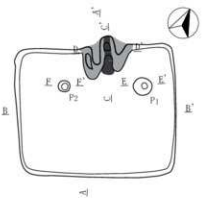


第 26 図　H14 号・18 号住居址遺物図 2

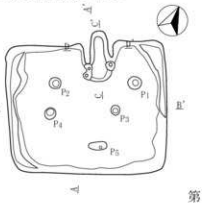


第 27 図　H15 号住居址遺構図・遺物図

H16 号住居址平面図



H16 号住居址掘方平面図



第 28 図　H16 号住居址遺構図・遺物図

方では 3 基のピットが検出された。P3・P4 が柱穴となり、建替えの痕跡と考えられる。

遺物は土師器と須恵器が出土した。1 は土師器の甕、2 は須恵器の坏である。これらの遺物から、本址は 6 世紀後半から 7 世紀の所産と考えられる。

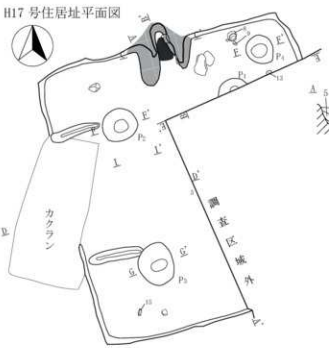
H17 号住居址（第 29 図）

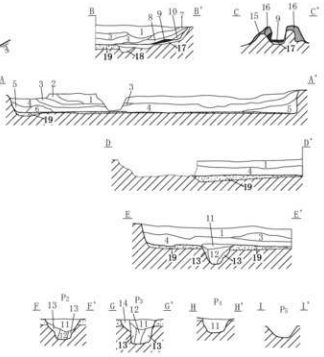
C-3 グリッドに位置し、F1 号掘立柱建物より新しい。南東部が調査区外となるが、方形を呈する住居址と考えられる。検出範囲で南北 5.86m、東西 5.37m、床面積は推定 31.47 ㎡を測る。検出面から床面までの深さは 0.40m で、主軸は W－14°－N である。カマドは北側中央に位置し、地山ローム層を削り出した袖部に、灰白色の良質な粘土と角礫を用いて築かれる。床面は硬質で、ピット 4 基と間仕切溝 2 条が検出された。P1 ～ P3 が柱穴と考えられ、P2・P3 から壁に向かって間仕切溝が延びる。貼床は 1 ㎝～ 12 ㎝の厚さで確認できるが、住居中央から南側では薄く確認できるのみである。掘方は西側の壁際に段状に浅くなる形状で、ピット 1 基が検出された。

遺物 7 は土師器と須恵器などが出土した。1 ～ 9 は土師器である。1 ～ 4 は坏で、1 ～ 3 は丸底で体部に稜をもつ。3 は内面黒色処理が施される。4 は須恵器坏身を模したものである。5 は鉢で、内面黒色処理が施される。6 は甕で、底部に葉脈圧痕が認められる。7 ～ 9 は壺で、8・9 は住居址北東の床面から出土した。10・11 は須恵器で、10 が坏、11 は壺ないし甕の口縁部である。12 は磨石、13 ～ 15 は編物石と考えられる。

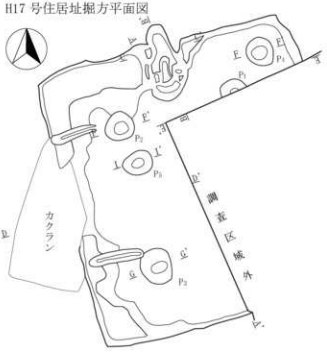
出土遺物から、本址は 7 世紀の所産と考えられる。

H17 号住居址平面図

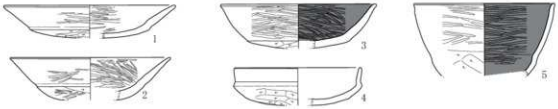




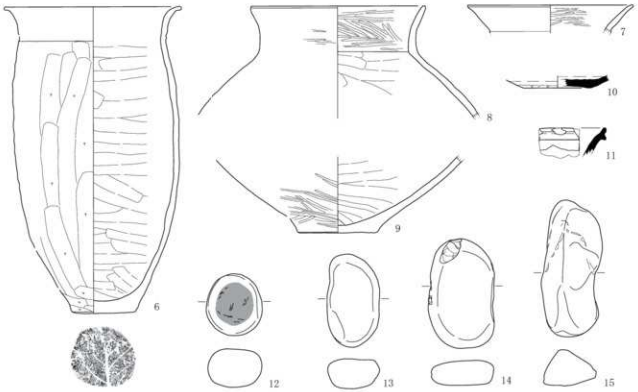
H17 号住居址掘方平面図



1 10YR4/1 褐灰色土 黒褐色土ブロック多量含む。
2 10YR4/1 褐灰色土 浅黄橙色土ブロック含む。
3 10YR7/4 にぶい黄橙色粘質土 褐灰色土ブロック含む。
4 10YR3/3 暗褐色土 黒褐色土・灰黄褐色土ブロック含む。
5 10YR4/2 灰黄褐色シルト質土 褐灰色土ブロック含む。
6 7.5YR7/6 橙色粘土
7 10YR5/1 褐灰色土 浅橙色粘土ブロック多量含む。
8 10YR3/1 黒褐色土 焼土ブロック・炭化物多量含む。
9 10YR2/1 黒色土 焼土層。
10 10YR4/1 褐灰色土 灰白色粘土ブロック含む。
11 10YR3/1 黒褐色土 ロームブロック含む。
12 10YR3/1 黒褐色土 しまり弱。灰黄褐色土ブロック含む。
13 10YR4/2 灰黄褐色土 ロームブロック多量含む。
14 10YR7/4 にぶい黄橙色土 ロームブロック多量含む。
15 10YR4/1 褐灰色土 しまり強。カマド構築土。
16 10YR8/1 灰白色粘土 しまり強。カマド構築土。
17 10YR3/1 黒褐色土 カマド構築土。炭化物・焼土ブロック多量含む。
18 10YR3/1 黒褐色土 ロームブロック多量含む。
19 10YR4/1 褐灰色土 貼床。ロームブロック多量含む。



第 29 図 H17 号住居址遺構図・遺物図 1



第 30 図　H17 号住居址遺物図 2

H18 号住居址（第 25・26 図）

B-6・11 グリッドに位置し、H14 号住居址より古い。東側を H14 号住居址により壊されるため全容は不明だが、検出範囲では南北 4.42m、東西 4.74m を測り、方形を呈すると考えられる。検出面から床面までの深さは 0.03m で、主軸は W－9°－N である。カマドの有無は不明である。床面は硬質で、H14 号住居址掘方で検出されたピットとあわせ 5 基のピットが検出された。P_1 ～ P_4 が柱穴と考えられ、南側の P_3・P_4 は壁面に位置する。貼床は 25 ㎝の厚さが確認できる。

遺物は掘方から土師器が出土した。1 は小型で無頸の壺と考えられる。本址の帰属時期については、8 世紀～ 9 世紀と捉えたい。

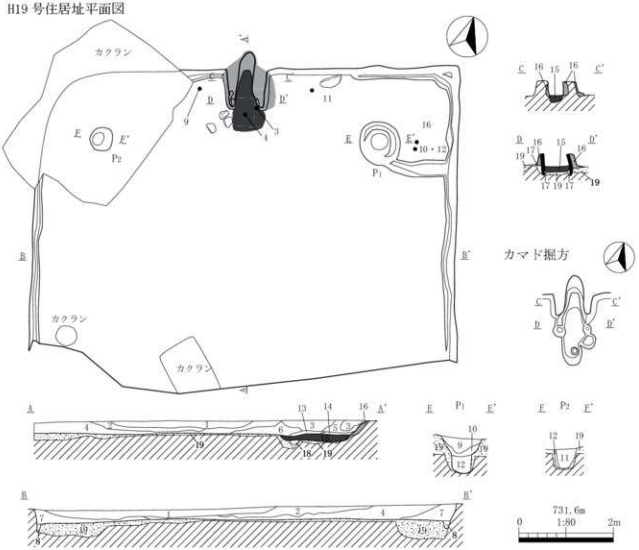
H19 号住居址（第 31・32 図）

C-9・10 グリッドに位置し、南側が調査区外に延び、北西部が撹乱を受け壊される。全容は不明だが、検出範囲では南北 6.68m、東西 8.70m を測る。検出面から床面までの深さは 0.35m で、主軸は W－16°－N である。カマドは北側中央に位置し、地山ローム層を削り出した袖部に、灰白色の良質な粘土と板状の扁平礫を用いて構築している。床面は硬質で、ピット 2 基と間仕切溝 1 条が検出された。ピット 2 基は柱穴と考えられる。貼床は 3 ㎝～ 40 ㎝の厚さで確認でき、掘方は中央部とカマド周辺が浅く、外周部が深く掘られる形状である。

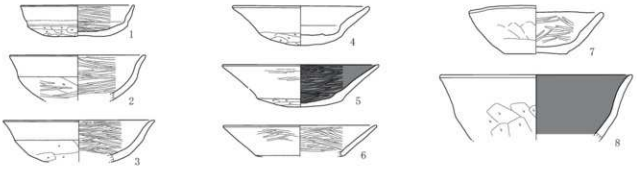
遺物は土師器と須恵器などが出土した。1 ～ 12 は土師器である。1 ～ 7 は坏で、1 ～ 6 は丸底で体部に稜をもち、5 は内面黒色処理が施される。7 は平底である。8 は鉢で、口縁部が弱く外反し、内面黒色処理が施される。9・10 は甕、11・12 は壺である。13・14 は須恵器で、13 は蓋、14 は甕の体部と考えられるタタキ目がみられる。15・16 は編物石と考えられる。

出土遺物から、本誌は 7 世紀～ 8 世紀前半の所産と考えられる。

H19 号住居址平面図

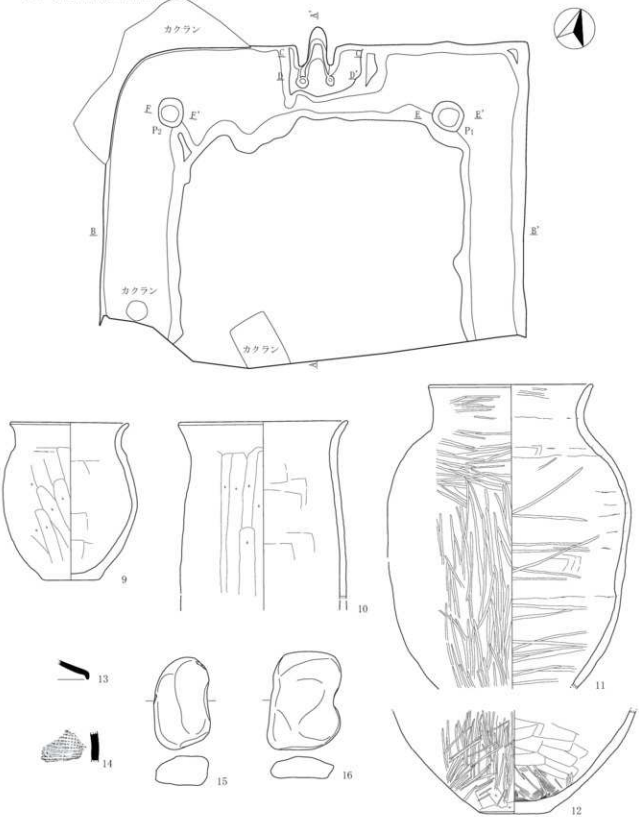


1　10YR3/1　黒褐色土　灰黄褐色土ブロック多量含む。
2　10YR3/1　黒褐色土　黄褐色土ブロック少量含む。
3　10YR8/1　灰白色粘土　褐灰色土ブロック含む。
4　10YR4/2　灰黄褐色土　黒色土ブロック含む。
5　10YR5/1　褐灰色土　灰白色粘土ブロック含む。
6　10YR4/2　灰黄褐色土　灰白色粘土ブロック、焼土含む。
7　10YR4/2　灰黄褐色土　黒褐色土・ロームブロック含む。
8　10YR3/1　黒褐色土　しまり弱。ロームブロック少量含む。
9　10YR4/2　灰黄褐色土　しまり弱。黒褐色土ブロック含む。
10　10YR4/2　灰黄褐色土　ロームブロック多量含む。
11　10YR3/3　暗褐色土　ロームブロック少量含む。
12　10YR3/1　黒褐色土　ロームブロック多量含む。
13　7.5YR7/4　にぶい橙色土　焼土、炭化物、灰白色粘土ブロック含む。
14　7.5YR7/4　にぶい橙色土　焼土、炭化物多量含む。
15　5YR7/6　橙色土　焼土層。
16　10YR8/1　灰白色粘土　表面被熱、カマド構築土。
17　10YR3/1　黒褐色土　ロームブロック含む。
18　10YR2/1　黒色土　しまり弱。カマド掘方。
19　10YR5/1　褐灰色土　貼床。黒色土・ロームブロック多量含む。



第 31 図　H19 号住居址遺構図 1・遺物図 1

H19 号住居址掘方平面図



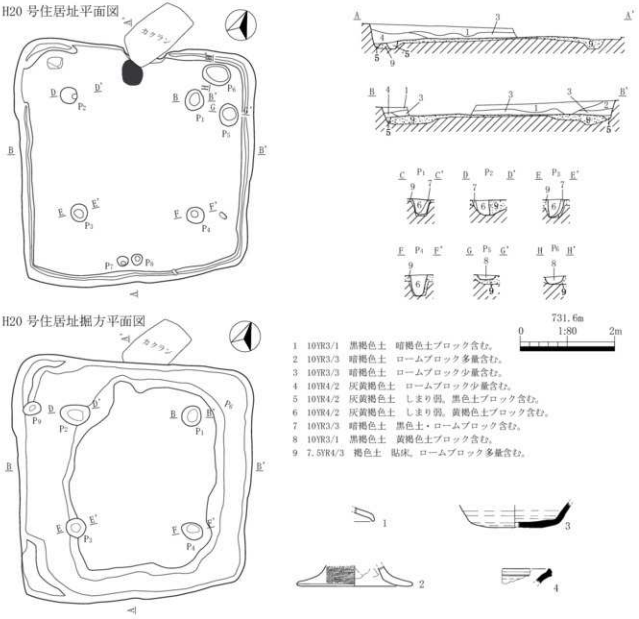
第 32 図　H19 号住居址遺構図 2・遺物図 2

H20 号住居址（第 33 図）

C-4・5 グリッドに位置する。方形を呈し、南北 4.82m、東西 4.68m、床面積 22.55 ㎡を測る。検出面から床面までの深さは 0.30m で、主軸は W - 19° - N である。カマドは北側中央に位置すると考えられる。攪乱を受け大部分が破壊されるが、地山が内側に張り出し、わずかだが焼土が確認できる。床面は硬質で、8 基のピットが検出された。P1 ～ P4 が柱穴、P7・P8 は入口施設と考えられる。貼床は 4 ～ 20 ㎝の厚さで確認でき、掘方は中央部が浅く、外周部が深く掘られる形状である。掘方ではピット 1 基が検出された。

遺物は土師器と須恵器が出土した。1･2 は土師器である。1 は蓋、2 は高坏の脚部で、屈曲気味に開く。3・4 は須恵器で、3 は坏、4 は壺の口縁部である。

これらの出土遺物から本址は 8 世紀の所産と考えたい。



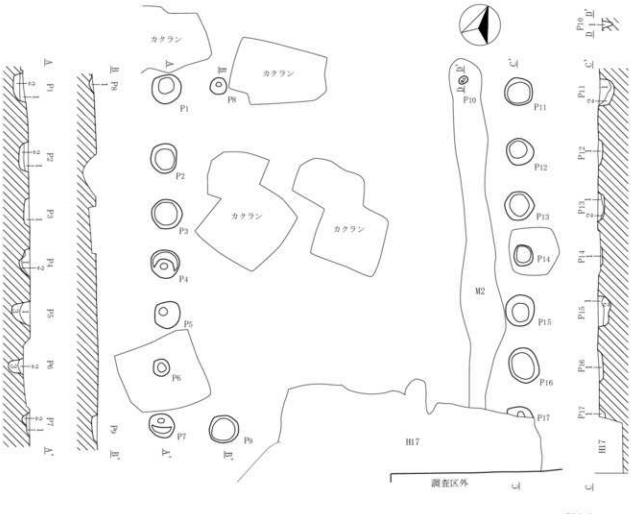
第 33 図　H20 号住居址遺構図・遺物図

第 2 節　掘立柱建物址

F1 号掘立柱建物址（第 34 図）

B-23・C-3 グリッドに位置し、H17 号住居址より古く、M2 号溝址より新しい。南側が H17 号住居址に壊されるため全容は不明だが、出入口を南側と仮定すると、桁行 7.46m、梁行 7.19m、面積 53.63 ㎡を測る方形の側柱建物址である。桁行は 3 間、柱間は 1.10 ～ 5.20m で中央が広くなる。梁行は 6 間で柱間は 1.05 ～ 1.55m を測る。柱穴は円形で深さ 8 ～ 37 cm、主軸は W-22°　- N である。

遺物は土師器の小破片が出土したが、図化し得るものはない。H17 号住居址との新旧関係から 7 世紀以前の所産と考えられる。



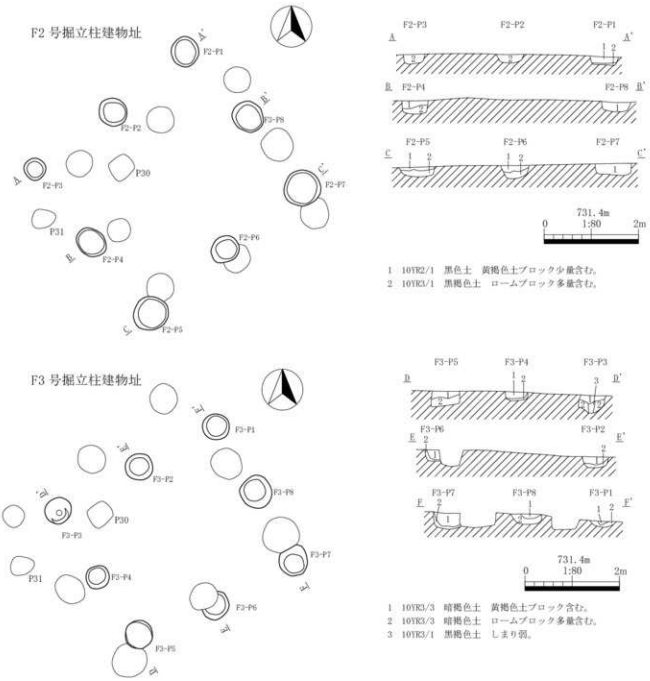
第 34 図　F1 号掘立柱建物址遺構図

F2 号掘立柱建物址（第 35 図）

D-1 グリッドに位置し、F3 号掘立柱建物址より新しい。桁行 3 間、梁行 3 間、面積 16.35 ㎡を測る方形の側柱建物址である。出入口を南側と仮定すると、桁行 4.14m で柱間は 2.00 ～ 2.07m、梁行 3.95m

で柱間は 1.92 ～ 1.97m を測る。柱穴は円形で深さ 18 ～ 28 cm、主軸は W-39° -N である。

遺物は土師器の小破片が出土したが、遺構の帰属時期は不明である。F3 号住居址から建替えられたものと考えられる。



第 35 図　F2・F3 号掘立柱建物址遺構図

F3 号掘立柱建物址（第 35 図）

D-1 グリッドに位置し、F2 号掘立柱建物址より古い。桁行 3 間、梁行 3 間、面積 12.47 ㎡を測る方形の側柱建物址である。出入口を南側と仮定すると、桁行 3.77m で柱間は 1.74 ～ 1.95m、梁行 3.31m

で柱間は 1.51 ～ 1.69m を測る。柱穴は円形で深さ 13 ～ 37 ㎝、主軸は W-32° -N を測る。

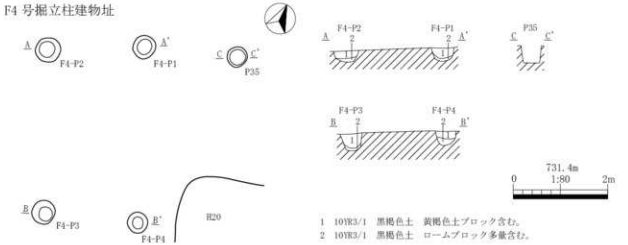
遺物は土師器の小破片が出土したが、遺構の帰属時期は不明である。F2 号住居址へ建替えが行われたものと考えられる。

F4 号掘立柱建物址（第 36 図）

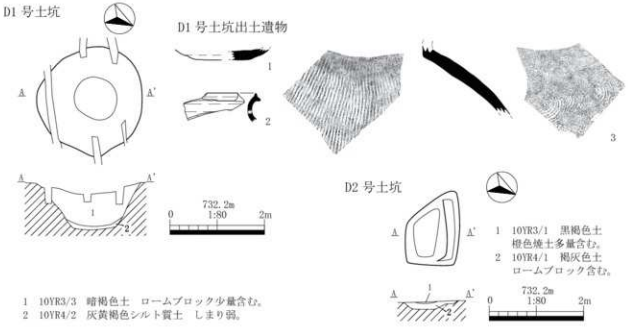
B-25、C-5 グリッドに位置する。桁行 1 間、梁行 1 間、を測る長方形の側柱建物址、あるいは東側の P35 を柱穴と捉え、南東側を H20 に破壊された桁行 2 間の側柱建物の可能性も考えられる。

1 間× 1 間の建物と仮定すると、南北の桁行が 3.71m、東西の梁行が 1.97m、面積 7.30 ㎡を測り、主軸は W-24° -N である。　2 間× 1 間の建物と仮定すると、東西の桁行が 4.00m、南北の梁行が 3.71m、面積 14.84 ㎡を測る。柱穴は円形で深さ 24 ～ 36 ㎝を測る。

遺物が出土していないため本址の帰属時期は不明である。



第 36 図　F4 号掘立柱建物址遺構図



第 37 図　D1・D2 号土坑遺構図・遺物図

第3節　土坑

D1号土坑（第37図）

B-16グリッドに位置する。長軸2.28m、短軸2.24mを測る円形の土坑である。断面台形を呈し、検出面から底面までの深さは0.99mである。

遺物は須恵器が出土した。1は坏の底部である。ヘラ切り後にロクロナデが施される。2は甕の口縁部と考えられる。3は甕の体部で、内外面にタタキ目がみられる。出土遺物から、7世紀以降の所産と考えたい。

D2号土坑（第37図）

B-12グリッドに位置する。長軸1.56m、短軸1.13mを測る台形の土坑である。北側に段をもち、断面台形を呈する。検出面から底面までの深さは0.16m、主軸はW-29°-Nである。上部を削平されていると考えられ、検出面で土坑中央にわずかに焼土層が確認できた。

遺物が出土していないため帰属時期は不明である。

第4節　溝址

M1号溝址（第38図）

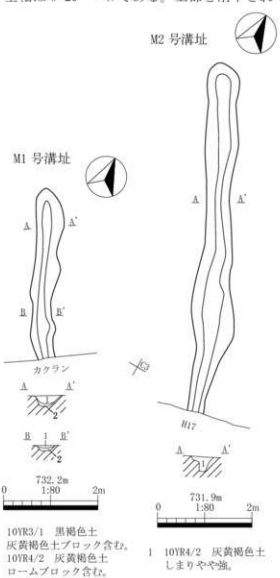
B-17グリッドに位置する。南側が撹乱を受け破壊されるため全容は不明だが、検出範囲で長軸3.58m、短軸0.37～0.58mを測る。断面は台形を呈し、検出面からの深さは0.11～0.22m、主軸はW-25°-Nである。

本址の帰属時期を特定し得る遺物は出土していないが、主軸方向が竪穴住居址と同じことから、古墳時代後期から平安時代の集落址に伴う溝と考えられる。

M2号溝址（第38図）

B-23グリッドに位置し、F1号掘立柱建物址及びH17号住居址より古い。南側がH17号住居址に破壊されるため全容は不明だが、検出範囲で長軸9.24m、短軸0.40～1.14mを測る。断面は台形を呈し、検出面からの深さは0.37m、主軸はW-25°-Nである。

本址の帰属時期を特定し得る遺物は出土していないが、M1号溝址同様、古墳時代後期から平安時代の集落址に伴う溝と考えられる。



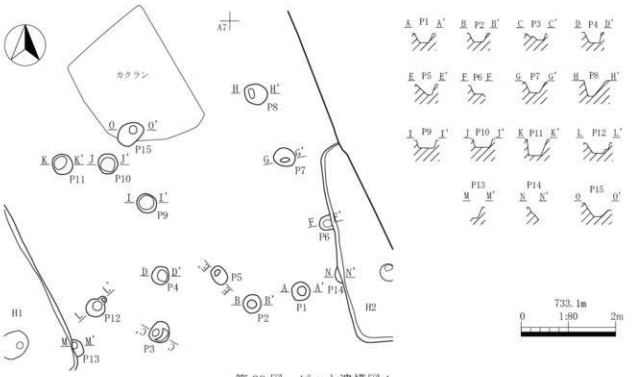
第38図　M1・M2号溝址遺構図

第５節　ピット

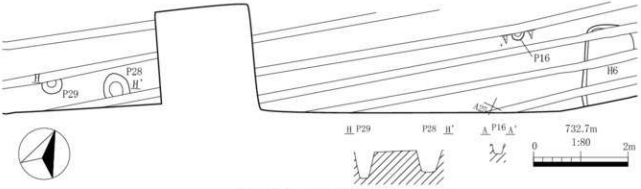
35 基のピットが検出された（第 40 ～ 42 図）。調査区外に続く掘立柱建物址の一部だけが検出されている可能性もあるが、ここでは単独ピットとする。調査区全域でピットが検出されているが、東端の A7 グリッド周辺の一群（P1 から P15）、調査区中央南側の A20 ～ B21 グリッドの一群（P16・P28・P29）、調査区中央北側の A15 グリッド周辺の一群（P17 ～ P27）、調査区西端の D6 グリッド周辺の一群（P30 ～ P34）に分けられる。

他遺構と切り合うものは少なく、P13 は H1 号住居址より古く、P6 及び P14 は H2 号住居址より古い。ピットの平面形は円形を呈するものが大半だが、P30 のように方形を呈するものも認められる。検出面から底面までの深さは 10 ～ 30 ㎝程度のものがほとんどだが、P22・P28・P29 は 50 ㎝以上の深さがある。調査区北東側、H9 号住居址から東側は、カクラン、削平が認められるため、浅いピットは削平されてしまっている可能性がある。

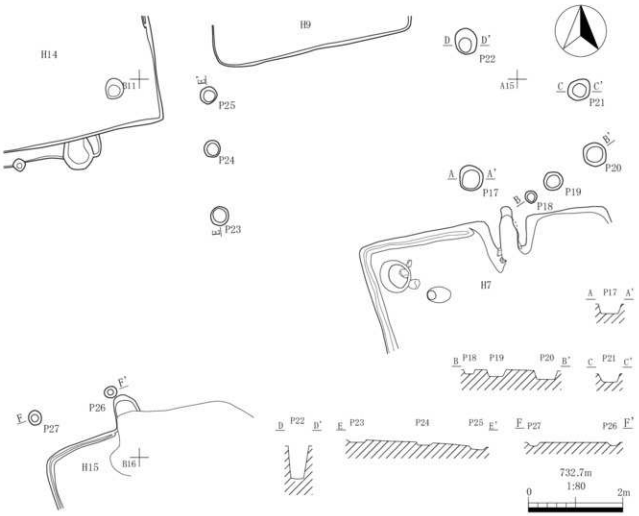
ピットからは土師器・須恵器の小破片が出土しているが、混入品と考えられる。各ピットの帰属時期は不明だが、住居址同様の時期、古墳時代後期から平安時代までの集落跡に伴う遺構と考えられる。



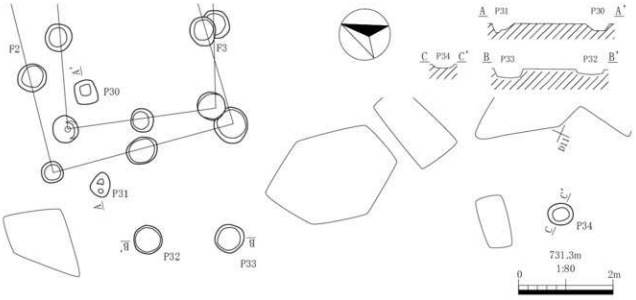
第 39 図　ピット遺構図 1



第 40 図　ピット遺構図 2



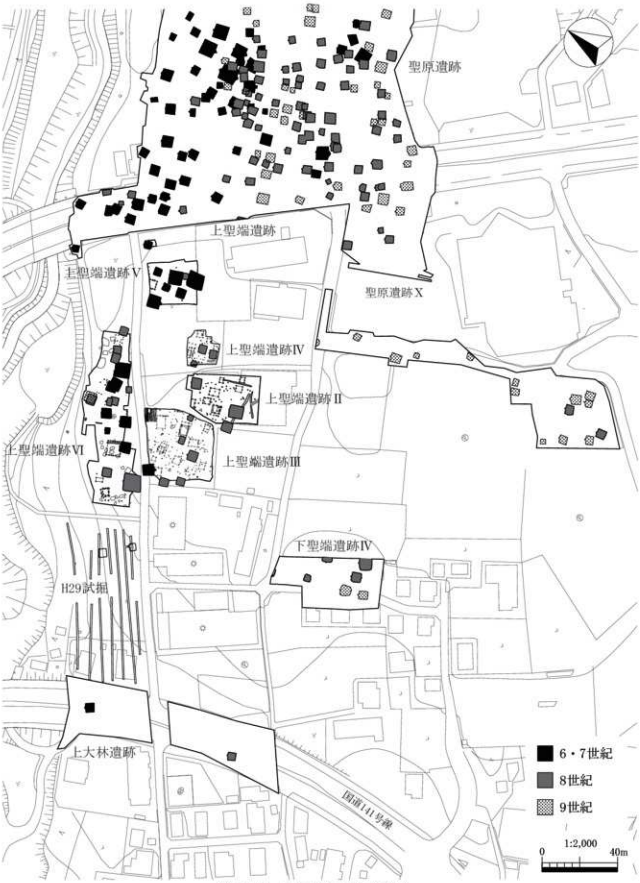
第 41 図　ピット遺構図 3



第 42 図　ピット遺構図 4

X=31988
X=31980
X=31972
X=31964
X=31956
X=31948
X=31940
X=31932
X=31924
Y=-2132
Y=-2140
Y=-2148
Y=-2156
Y=-2164
Y=-2172
Y=-2180
Y=-2188
Y=-2196
Y=-2204
Y=-2212
Y=-2220
H2
P14
P9a
P6
P1
P2
P5
P9
P4
P3
P13a
P10
P12
P13
P1P
H1
H5
H3
H4
H8
H6
P21
P20
P19a
P18
P17
P22
H13
H7
H9
P25
P24
P23
H10
P26
H15
P27
H14
H18
H12
D1
P28
P29
H11
M1
D2
H16
H17
M2
F1
H19
H20
P35
F4
F3
P30
F2
P31
P32
P33
P34
0
1:400
8m

第 43 図　調査区全体図



第 44 図　周辺の住居址分布図

第Ⅳ章　まとめ

本調査区では20軒の竪穴住居址が検出され、出土遺物や新旧関係から、6世紀後半から9世紀の間に位置づけられる。本遺跡周辺では、聖原遺跡をはじめとして上聖端遺跡、下聖端遺跡、上大林遺跡などで集落跡が確認されている。開発事業ごとに遺跡名を付しているため名称は異なるが、いずれも濁川左岸台地上に広く展開する同一集落と考えられる。聖原遺跡の調査成果及び時期区分によって、集落の変遷を概観したい。

聖原遺跡では6世紀前半の竪穴住居址が3軒検出されているが、 本調査区周辺ではこの時期の住居址は確認されていない。6世紀後半になると様相が一変し、100軒を超える住居址が確認され、計画的に集落が形成されたことを示している。7世紀には住居址数は減少するが居住域が拡大する様相が捉えられている。本調査区においてはH4・H7・H8・H11・H12・H13・H16・H17の8軒が6～7世紀に位置づけられ、隣接する上聖端遺跡Ⅲ、上聖端遺跡Ⅴ、南側の上大林遺跡で同時期の住居址が確認されている。上聖端遺跡Ⅴの7軒、上聖端遺跡Ⅲの1軒、上大林遺跡の1軒及び本遺跡H12が6世紀代に位置づけられ、東西に帯状に形成された居住域の西端部にあたると考えられる。本遺跡H4・H7・H8・H11・H13・H16・H17は7世紀代と考えられるが、居住域が拡大する中で形成されたものと考えられる。H19号住居址についても7世紀代の所産である可能性がある。

聖原遺跡においては、8世紀になると7世紀の居住域を踏襲しながらも、東西に伸びる十数軒程度のまとまりが変遷する状況が捉えられる。本調査区ではH1・H2・H3・H6・H10・H15・H18・H19・H20の9軒が8世紀に位置づけられる。上聖端遺跡Ⅴで1軒、上聖端遺跡Ⅳで3軒、上聖端遺跡Ⅱで3軒、上聖端遺跡Ⅲで5軒、下聖端遺跡の5軒、上大林遺跡の1軒が同時期に位置づけられ、本遺跡周辺においては7世紀よりも住居数は増加している。集落が西側に拡大した結果と考えられ、本遺跡周辺を一つのまとまりとして捉えることも可能かもしれない。

9世紀になると、聖原遺跡では集落の最盛期を過ぎ、縮小傾向が伺える。住居址のまとまりも東西方向から南北に伸びるまとまりとなるようである。本遺跡ではH14の1軒が9世紀に位置づけられる。周辺では下聖端遺跡Ⅳの2軒、聖原遺跡Ⅹの13軒が同時期に位置づけられる。本遺跡周辺では住居が減少し、居住域が南に移るようである。本遺跡周辺では10世紀以降の住居址が検出されていないことから、集落は東側に縮小していったと考えられる。

以上、聖原遺跡の成果を基に、住居址の分布から集落の変遷を概観したが、6・7世紀の形成期、8世紀の拡大最盛期、9世紀以降の衰退期と大まかに捉えるならば、本調査区における住居址の消長もこれに符合する。本調査区より西側の状況に不明確な部分はあるが、西側隣接地における平成29年度の試掘調査結果では、2軒の住居址が確認されるのみであり、東側に比べ遺構密度が低い。本調査区の出土遺物をみても、一般的な日用品のみで、東側の聖原遺跡で出土しているような官衙的あるいは公的性格を有する遺物は出土していない。このことから、本調査区周辺は聖原遺跡を中心とする大規模集落の西端部にあたると考えられるが、聖原遺跡同様、佐久郡衙に関わる人々が居住していた可能性が考えられる。

参考文献

佐久市教育委員会　1992　「長土呂遺跡群　上大林遺跡」
『佐久市埋蔵文化財調査報告書第9集　国道141号線関係遺跡』
佐久市教育委員会　1993　『佐久市埋蔵文化財調査報告書第24集　長土呂遺跡群　上聖端遺跡』
佐久市教育委員会　2000　『佐久市埋蔵文化財調査報告書第83集　長土呂遺跡群　下聖端遺跡Ⅳ』
佐久市教育委員会　2005　『佐久市埋蔵文化財調査報告書第126集　長土呂遺跡群　聖原』第5分冊
佐久市教育委員会　2012　『佐久市埋蔵文化財調査報告書第211集　長土呂遺跡群　上聖端遺跡Ⅱ』
佐久市教育委員会　2014　『佐久市埋蔵文化財調査報告書第226集　長土呂遺跡群　上聖端遺跡Ⅲ』
佐久市教育委員会　2017　『佐久市埋蔵文化財調査報告書第252集　長土呂遺跡群　上聖端遺跡Ⅳ』
佐久市教育委員会　2021　『佐久市埋蔵文化財調査報告書第288集　長土呂遺跡群　上聖端遺跡Ⅴ』

遺構	番号	種別	器種	法量（cm）			成形・調整・文様等		出土位置	備考
				口径（長）	底径（幅）	器高（厚）	内面	外面		
H1	1	土師器	坏	14.0	11.2	4.8	暗文	ヨコナデ、ヘラケズリ	Ⅲ・Ⅳ区	
H1	2	土師器	坏	—	—	(3.0)	ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラケズリ	Ⅲ区	
H1	3	土師器	鉢か	(9.0)	—	(5.2)	ナデ	ヨコナデ ヘラケズリ→ヘラミガキ	カマド脇方	
H1	4	土師器	甕	(19.6)	—	(8.5)	ナデ	ナデ	Ⅱ区脇方・Ⅳ区	
H1	5	土師器	壺	(17.6)	—	(3.6)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	Ⅰ区	
H1	6	土師器	壺	(24.6)	—	(6.7)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	Ⅰ区床面	
H1	7	土師器	壺	(27.2)	—	(22.3)	ヘラミガキ	ヘラケズリ→ヘラミガキ	Ⅱ区床面	
H1	8	須恵器	坏	—	—	(3.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	Ⅲ区	
H1	9	須恵器	蓋	—	—	(2.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	Ⅳ区	
H1	10	須恵器	蓋	(12.6)	—	(1.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	Ⅰ区	
H1	11	須恵器	壺	—	(11.0)	(8.6)	ロクロナデ	タタキ→ロクロナデ	Ⅱ区	
H1	12	石器	磨石	15.1	3.6	4.6	磨面1		Ⅳ区	
H1	13	石器	磨石	11.3	8.0	3.0	磨面2、縁辺に敲打痕		P6	
H2	1	土師器	碗	—	—	(2.0)	ヘラミガキ、黒色処理	ヘラミガキ		
H2	2	土師器	甕	(18.4)	—	(2.8)	ナデ	ナデ		
H2	3	須恵器	蓋	(15.8)	—	(1.5)	ロクロナデ、火襷痕	ロクロナデ、火襷痕		
H2	4	須恵器	坏	—	—	(3.2)	ロクロナデ、火襷痕	ロクロナデ		
H2	5	須恵器	坏	—	—	(3.3)	ロクロナデ	ロクロナデ		
H2	6	須恵器	壺	(9.0)	—	(1.8)	ロクロナデ、自然釉	ロクロナデ、自然釉		
H3	1	土師器	羽釜	(21.6)	—	(16.2)	ロクロナデ、ヘラナデ	ロクロナデ、ヘラケズリ		
H3	2	土師器	羽釜	—	—	(16.2)	ロクロナデ、ヘラナデ	タタキ、ヘラケズリ		
H3	3	須恵器	坏	—	—	(3.9)	ロクロナデ、火襷痕	ロクロナデ、火襷痕		
H3	4	須恵器	坏	—	—	(3.5)	ロクロナデ、火襷痕	ロクロナデ、火襷痕		
H3	5	石器	砥石	8.4	3.5	2	両端欠損、砥面4			
H3	6	鉄器	長頸鏃	7.2	1.0	0.7	茎部欠損			
H4	1	土師器	坏	13.7	6.1	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ、底部回転糸切	Ⅰ区　混入	
H4	2	土師器	坏	15.7	9.1	3.9	ヘラミガキ・黒色処理	ヨコナデ、底部ヘラケズリ	Ⅰ区床面	
H4	3	土師器	坏	15.0	9.3	4.1	ヘラミガキ・黒色処理	ヨコナデ、底部ヘラケズリ	Ⅰ区床面	
H4	4	土師器	高坏	17.8	13.3	15.1	ヘラミガキ・黒色処理	ヘラケズリ、ヘラミガキ	Ⅰ区床面	
H4	5	土師器	甕	18.4	—	(14.8)	ヘラナデ	ヘラケズリ、ヨコナデ	Ⅱ区床面	
H4	6	土師器	甕	(19.2)	—	(20.3)	ハケ目、ヨコナデ	ハケ目、ヨコナデ	Ⅰ区・P9	
H4	7	土師器	甕	18.7	7.3	32.6	ヘラナデ、ヘラミガキ	ヘラケズリ、ヘラミガキ	Ⅱ区床面	
H4	8	土師器	甕	—	(11.4)	(5.3)	ナデ	ナデ	Ⅰ区	
H4	9	土師器	壺	—	—	(11.5)	ハケ目、ヘラケズリ	ヘラミガキ	Ⅰ区	
H4	10	土師器	壺	—	(6.6)	(3.2)	ヘラナデ	ヘラミガキ	Ⅰ区	
H4	11	土師器	壺	(13.6)	(5.6)	(16.8)	ハケ目、ヨコナデ、ヘラミガキ	ヘラミガキ	Ⅱ・Ⅳ区	
H4	12	土師器	壺	(17.6)	(8.2)	32.2	ヘラナデ、ヘラミガキ	ヘラケズリ、ヘラミガキ	Ⅱ区床面	
H4	13	土師器	壺	19.2	—	(20.3)	ヘラナデ、ヘラミガキ	ヘラケズリ、ヘラミガキ	Ⅳ区床面	
H4	14	土師器	壺	28.1	—	(25.8)	ヘラナデ、ヘラミガキ	ヘラミガキ	Ⅱ区P5上	
H4	15	土製品	紡錘車	7.1	4.7	4.3	孔径0.7　一部ヘラミガキ		Ⅱ区	
H4	16	石製品	臼玉	1.4	—	0.5	孔径0.3　一部欠損		Ⅰ区	
H4	17	石器	固石	8.6	7.4	3.9	両面中央に固み		Ⅰ区床面	
H4	18	石器	敲石	10.7	5.7	4.0	両端部に敲打痕		Ⅱ区床面	
H4	19	石器	敲石	10.8	6.1	4.1	両端部に敲打痕		P9	
H4	20	石製品	支脚	16.6	6.6	6.5			Ⅱ区	
H4	21	石器	磨石	16.0	6.4	3.5	磨面2		Ⅰ区	
H4	22	石器	砥石	(21.1)	(9.2)	(3.7)	一部欠損、砥面4		Ⅳ区床面	
H4	23	石器	砥石	29.7	13.6	8.0	砥面4		Ⅲ区床面	
H6	1	土師器	坏	(16.3)	(13.9)	4.0	ナデ	ヘラケズリ	脇方	
H6	2	土師器	甕	(22.8)	—	(6.2)	ヘラナデ	ヘラケズリ		
H6	3	須恵器	坏	—	—	(2.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	Ⅱ区	
H6	4	石製品	支脚	(22.5)	(6.5)	(6.0)	被熱、一部欠損		カマド	
H6	5	石製品	支脚	19.0	8.1	5.6	被熱		カマド	
H7	1	土師器	坏	(12.8)	—	5.0	ヘラミガキ、黒色処理	ヘラケズリ、ヘラミガキ	Ⅰ区	

第1表　遺物観察表1

遺構	番号	種別	器種	法量（cm）			成形・調整・文様等		出土位置	備考
				口径（長）	底径（幅）	器高（厚）	内面	外面		
H7	2	土師器	坏	—	—	(3.5)	ヘラミガキ	ヘラケズリ、ナデ	P6	
H7	3	土師器	坏	—	—	(4.8)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	Ⅲ区掘方	
H7	4	土師器	坏	—	—	(4.1)	ヘラミガキ、黒色処理	ヘラミガキ	カマド	
H7	5	土師器	坏	—	—	(4.3)	ヘラミガキ、黒色処理	ヘラミガキ	Ⅱ区	
H7	6	土師器	坏	(18.0)	—	(3.8)	ヘラミガキ、黒色処理	ヘラミガキ	Ⅱ・Ⅳ区	
H7	7	土師器	高坏	—	—	(2.6)	坏部：ヘラミガキ、黒色処理 脚部：ナデ、黒色処理	ヘラミガキ	Ⅳ区	
H7	8	土師器	壺	13.9	6.4	13.5	ヘラミガキ	ヘラケズリ、ヘラミガキ	Ⅳ区床面	
H7	9	土師器	壺	(25.4)	—	(11.3)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	Ⅲ区	
H7	10	土師器	壺	—	(6.4)	(3.1)	ナデ	摩耗により不明	Ⅲ区	
H7	11	土師器	甕	(24.6)	—	(5.0)	ヨコナデ	ヘラケズリ	Ⅱ区	
H7	12	土師器	甕	(18.6)	5.2	32.3	ハケ目、ヘラナデ	ヘラケズリ、ヘラミガキ	カマド、Ⅱ区	
H7	13	土師器	甕	(22.2)	—	(17.7)	ヘラナデ	ヘラケズリ	Ⅰ・Ⅱ区	
H7	14	土師器	甕	(20.4)	—	(15.3)	ヘラナデ	ヘラケズリ	Ⅰ区	
H7	15	土師器	甕	—	—	(25.1)	ヘラナデ	ヘラケズリ	カマド、Ⅱ区	
H7	16	土製品	丸玉	1.1	1.1	0.7	孔径 0.15 cm		Ⅰ区	
H7	17	石器	磨石	11.2	6.5	3.5	磨面 1、端部に敲打痕		Ⅳ区	
H7	18	鉄製品	鏃	(4.3)	(3.5)	(1.5)	刃先のみ		Ⅳ区	
H7	19	鉄製品	長頸鏃	(10.1)	(1.2)	0.5	茎部先端欠損、屈曲		Ⅲ区	
H10	1	土師器	甕	(23.2)	—	(13.3)	ヘラナデ	ヘラケズリ	Ⅳ区床面	
H10	2	須恵器	蓋	13.4	2.7	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ、 天井部ヘラケズリ	Ⅰ区床面	
H10	3	須恵器	蓋	—	—	(1.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	Ⅱ区	
H10	4	須恵器	蓋	(14.4)	—	(1.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	Ⅲ区	
H11	1	弥生土器	甕	—	—	(2.0)	ヘラミガキ	櫛描波状文、櫛描簾状文	Ⅰ区	
H11	2	土師器	坏	(14.4)	—	(3.4)	ヘラミガキ、黒色処理	ヘラミガキ	Ⅰ区	
H11	3	土師器	坏	(14.8)	—	4.3	ヘラミガキ、黒色処理	ヘラミガキ	Ⅰ区	
H11	4	土師器	坏	—	—	(4.2)	ヘラミガキ、黒色処理	ヘラミガキ	Ⅰ区	
H11	5	土師器	坏	—	—	(3.2)	ヘラミガキ、黒色処理	ヘラミガキ	Ⅰ区	
H11	6	土師器	鉢	(22.4)	—	(7.9)	ヘラミガキ、黒色処理	ヘラミガキ	Ⅰ・Ⅱ区	
H11	7	土師器	甕	(15.6)	—	(8.3)	ヘラナデ	ヘラケズリ	カマド	
H11	8	土師器	壺	—	(5.8)	(7.0)	ヘラナデ	ヘラケズリ	カマド	
H11	9	土師器	壺	—	—	(19.3)	ヘラナデ、ヘラミガキ	ヘラミガキ	カマド	
H11	10	石器	編物石	11.2	5.8	3.0	両側縁に抉り		Ⅱ区	
H11	11	石器	剥片	3.1	1.6	0.7	縁辺に二次加工される黒曜石剥片		Ⅰ区	
H12	1	土師器	坏	15.2	9.2	4.2	ヘラミガキ、黒色処理	ヘラミガキ	Ⅰ・Ⅲ区	
H12	2	土師器	坏	15.9	11.0	4.0	ヘラミガキ、黒色処理	ヨコナデ、ヘラケズリ	Ⅲ区、カマド	
H12	3	土師器	坏	(15.2)	(11.6)	(3.7)	ハケ目状のヨコナデ ヘラミガキ、黒色処理	ヘラミガキ	Ⅲ・Ⅳ区	
H12	4	土師器	坏	(12.6)	(5.7)	4.6	ヘラミガキ	ヘラミガキ	Ⅲ区	
H12	5	土師器	鉢	(13.8)	(5.0)	7.2	ヘラミガキ	ヘラミガキ	Ⅲ・Ⅳ区	
H12	6	土師器	高坏	17.0	—	(5.4)	ヘラミガキ、黒色処理	ヘラミガキ	Ⅳ区	
H12	7	土師器	高坏	—	—	(6.8)	ヘラナデ、黒色処理	ヘラミガキ	Ⅲ区	
H12	8	土師器	甕	—	5.9	(7.1)	ヘラナデ	ヘラケズリ	Ⅱ区	
H12	9	土師器	甕	(13.8)	5.5	10.5	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ	Ⅳ区	
H12	10	土師器	甕	(18.6)	—	(27.4)	ヘラナデ	ヘラケズリ	カマド	
H12	11	土師器	甕	(20.2)	—	(18.4)	ヘラナデ	ヘラケズリ	Ⅳ区優跡	
H12	12	土師器	甕	(16.0)	—	(17.9)	ハケ目、ナデ	ヨコナデ	カマド	
H12	13	土師器	甕	(15.0)	—	(8.9)	ヘラナデ	ヘラケズリ	Ⅰ区	
H12	14	土師器	甕	(17.0)	—	(6.8)	ヘラナデ	ヘラケズリ	Ⅳ区	
H12	15	土師器	甕	—	(6.8)	(2.9)	ナデ	ヘラケズリ	Ⅳ区	
H12	16	土師器	甕	—	(5.9)	(30.1)	ヘラナデ	ヘラケズリ	Ⅳ区床面	
H12	17	土師器	甕	—	5.2	(8.8)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	Ⅳ区	
H12	18	土師器	甑	—	(12.0)	(4.7)	ヘラミガキ	摩耗により不明	Ⅱ区	
H12	19	土師器	坏	(12.6)	14.8	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ区	
H12	20	須恵器	坏	—	—	(2.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	Ⅰ区	
H12	21	石器	凹石	10.0	8.6	5.6	凹径 5.5～5.8 cm、深さ 1.5 cm		Ⅲ区	

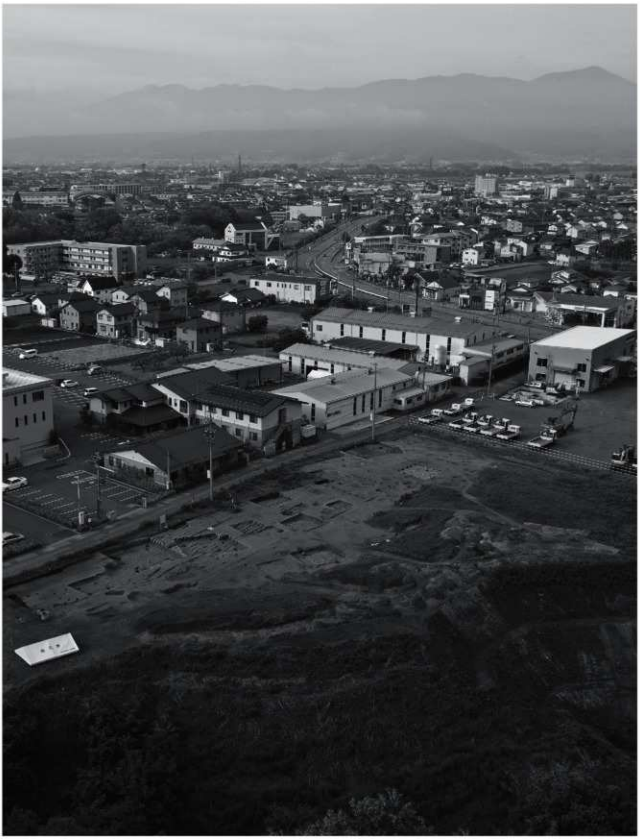
第２表　遺物観察表２

遺構	番号	種別	器種	法量（cm）			成形・調整・文様等		出土位置	備考
				口径（長）	底径（幅）	器高（厚）	内面	外面		
H12	22	石器	敲石	11.5	5.8	3.3	側面に敲打痕		Ⅳ区	
H12	23	石器	磨物石	8.3	7.4	2.7	端部に使用痕		Ⅲ区	
H12	24	石器	磨物石	8.9	5.9	4.5			Ⅲ区	
H12	25	石器	磨物石	7.9	6.5	4.7	側辺に挟りか		Ⅲ区	
H12	26	石器	磨物石	9.3	7.1	4.2			Ⅲ区	
H12	27	石器	磨物石	11.0	4.6	2.8			Ⅲ区	
H12	28	石器	磨物石	12.7	6.9	2.3	両側辺に挟り		Ⅲ区	
H12	29	石器	磨物石	12.4	6.9	4.7			Ⅲ区	
H12	30	鉄製品	鎌	12.1	1.9	0.2	一部欠損		Ⅲ区	
H13	1	縄文土器	深鉢	—	—	(2.2)		楕円文	Ⅱ区	
H13	2	土師器	坏	(15.4)	(10.2)	3.8	ヘラミガキ	ヘラケズリ、ヘラミガキ	Ⅰ区	
H13	3	土師器	坏	(15.1)	(11.4)	4.3	ヘラミガキ	ヘラケズリ、ヘラミガキ	Ⅰ区	
H13	4	土師器	坏	(14.2)	—	(3.8)	ヘラミガキ	ヘラケズリ、ヘラミガキ	撹乱	
H13	5	土師器	坏	(14.0)	(14.6)	4.6	ヘラミガキ（暗文）	ヘラケズリ、ヨコナデ	Ⅰ区	
H13	6	土師器	鉢	—	—	(6.4)	ヘラミガキ、黒色処理	ヘラケズリ	Ⅰ・Ⅱ区	
H13	7	土師器	甕	(18.2)	—	(12.9)	ナデ	ヘラケズリ	Ⅲ区床面	
H13	8	土師器	甕	(19.0)	—	(3.6)	ヨコナデ	ヨコナデ	Ⅱ区	
H13	9	土師器	甕	(21.8)	—	(4.4)	ヨコナデ	ハケ目	Ⅱ区	
H13	10	土師器	甕	—	—	(3.9)	ヘラミガキか	ヨコナデ	Ⅲ区	
H13	11	土師器	甕	—	—	(4.5)	ヘラナデ	ナデ	Ⅱ区	
H13	12	土師器	甕	—	7.8	(9.2)	ヘラナデ	ヘラケズリ、ヘラミガキ	Ⅳ区床面	
H13	13	土師器	甕	—	(6.2)	(12.3)	ナデ	ヘラケズリ	Ⅱ区	
H13	14	土師器	甕	—	(6.4)	(9.3)	ヘラナデ	ヘラケズリ	Ⅱ区	
H13	15	土師器	壺	(16.4)	—	(5.2)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	Ⅰ区	
H13	16	土師器	壺	—	7.2	(2.5)	ヘラナデ、ヘラミガキ	ヘラケズリ、ヘラミガキ	Ⅱ区	
H13	17	土師器	壺	—	8.2	(4.4)	ナデ	摩耗により不明	Ⅰ区	
H13	18	須恵器	蓋	—	—	(1.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	Ⅰ区	
H13	19	石器	石鏃	(2.0)	(1.3)	(0.4)	黒曜石、脚部欠損		Ⅰ区	
H13	20	石器	磨石	10.6	6.1	3.7	端部に赤色顔料付着		Ⅰ区床面	
H13	21	石器	磨石	16.9	9.1	3.9	磨面５		Ⅱ区	
H13	22	石器	磨物石	8.0	6.5	3.4	両側に挟り		Ⅳ区床面	
H13	23	石器	磨物石	8.4	6.1	3.0			Ⅳ区床面	
H13	24	石器	磨物石	9.2	6.2	3.9	左側に挟り		Ⅳ区床面	
H13	25	石器	磨物石	11.5	6.8	2.9			Ⅳ区床面	
H13	26	石器	磨物石	8.7	6.0	5.7			Ⅳ区床面	
H13	27	石器	磨物石	7.9	7.1	2.9	右側面に使用痕		Ⅳ区床面	
H13	28	石器	磨物石	9.8	6.9	2.6	右側面に使用痕		Ⅳ区床面	
H13	29	石器	磨物石	9.0	7.3	5.0	右側に挟り		Ⅳ区床面	
H13	30	石器	磨物石	9.7	7.3	4.2			Ⅳ区床面	
H13	31	石器	磨石	9.3	6.9	4.0	両側に挟り		Ⅳ区床面	
H13	32	石器	磨物石	9.9	5.2	4.3	両側に使用痕		Ⅳ区床面	
H13	33	石器	磨物石	8.8	6.1	4.0	左側から裏面に使用痕		Ⅳ区床面	
H13	34	石器	磨物石	13.1	5.8	2.5	端部に使用痕		Ⅳ区床面	
H13	35	石器	磨物石	7.4	5.9	4.8			Ⅳ区床面	
H13	36	石器	磨物石	8.9	5.2	4.5			Ⅳ区床面	
H13	37	石器	磨物石	8.4	6.9	2.5	両側に挟り		Ⅳ区床面	
H14	1	土師器	鉢	(8.8)	—	(3.4)	ヘラミガキ、黒色処理	ヘラミガキ、黒色処理	Ⅱ区	
H14	2	土師器	甕	(11.4)	—	(3.9)	ナデ	ヘラケズリ	Ⅳ区	
H14	3	土師器	甕	(20.2)	—	(11.9)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	P2	
H14	4	須恵器	坏	—	(9.0)	(1.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	Ⅱ区	
H14	5	須恵器	壺	—	9.1	(4.3)	ロクロナデ	ロクロナデ、回転糸切	Ⅲ区	
H14	6	灰釉陶器	碗	—	7.2	(4.0)	ロクロナデ、施釉	ロクロナデ、施釉	Ⅳ区床面	
H14	7	石器	磨石	14.1	5.1	3.2	磨面１、敲打痕		Ⅲ区	
H14	8	石器	磨物石	10.4	4.7	3.3	両側に使用痕		Ⅳ区床面	
H14	9	石器	磨物石	11.3	7.1	2.7	両側に使用痕		Ⅳ区床面	

第３表　遺物観察表３

遺構	番号	種別	器種	法量（cm）			成形・調整・文様等		出土位置	備考
				口径（長）	底径（幅）	器高（厚）	内面	外面		
H14	10	石器	剥物石	9.6	6.6	3.5	両側に抉り		Ⅳ区床面	
H14	11	石器	剥物石	10.8	6.8	2.5			Ⅳ区床面	
H14	12	石器	剥物石	9.6	5.4	3.7	両側に使用痕		Ⅲ区掘方	
H14	13	石器	剥物石	11.2	5.0	4.0			Ⅲ区掘方	
H14	14	石器	剥物石	9.8	5.5	3.3			Ⅲ区掘方	
H14	15	石製品	石製模造品	(4.3)	2.4	0.7	滑石、孔径0.3cm、未成品		Ⅰ区	
H15	1	土師器	甕	(22.2)	—	(5.6)	ヘラナデ	ヘラケズリ	カマド	
H15	2	土師器	甕	—	(6.0)	(21.2)	ヘラナデ	ヘラケズリ	カマド・Ⅰ区	
H16	1	土師器	甕	(17.0)	—	(7.5)	ヘラナデ	ヘラケズリ	Ⅱ区	
H16	2	須恵器	坏	(12.8)	—	(2.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	Ⅰ区	
H17	1	土師器	坏	(18.2)	(12.6)	(3.5)	ヘラミガキ	ヘラケズリ、ヘラミガキ	Ⅰ区	
H17	2	土師器	坏	(17.0)	(11.4)	(4.5)	ヘラミガキ	ヘラケズリ、ヘラミガキ	Ⅱ区	
H17	3	土師器	坏	(16.6)	(10.8)	(4.7)	ヘラミガキ，黒色処理	ヘラケズリ、ヘラミガキ	Ⅲ区	
H17	4	土師器	坏	(13.4)	(13.6)	(4.0)	ナデ	ヘラケズリ、ヨコナデ	Ⅱ区	
H17	5	土師器	鉢	(15.0)	—	(7.7)	ヘラミガキ，黒色処理	ヘラケズリ、ヘラミガキ	Ⅲ区	
H17	6	土師器	甕	18.7	6.7	32.3	ヘラナデ	ヘラケズリ	カマド	
H17	7	土師器	壺	(17.6)	—	(3.0)	ヘラミガキ	ヨコナデ	Ⅱ区	
H17	8	土師器	壺	18.5	—	(11.9)	ヘラナデ、ヘラミガキ	ヘラミガキ	Ⅰ区床面	
H17	9	土師器	壺	—	8.4	(8.1)	ヘラナデ	ヘラミガキ	Ⅰ区床面	
H17	10	須恵器	坏	—	(7.0)	(1.3)	ロクロナデ	ヘラケズリ、ロクロナデ	Ⅲ区	
H17	11	須恵器	壺	—	—	(2.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	Ⅲ区	
H17	12	石器	磨石	6.6	5.9	4.1	磨面2		Ⅲ区	
H17	13	石器	剥物石	9.9	5.6	3.4			P2	
H17	14	石器	剥物石	11.6	7.0	2.6	縁辺に使用痕		Ⅰ区床面	
H17	15	石器	剥物石	14.5	6.4	4.0			Ⅲ区床面	
H18	1	土師器	小型壺	(4.0)	3.4	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ，底部回転糸切	掘方	
H19	1	土師器	坏	(12.0)	(10.6)	3.3	ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラケズリ	カマド	
H19	2	土師器	坏	(14.4)	(12.6)	(4.8)	ヘラミガキ	ヘラケズリ、ヘラミガキ	Ⅱ区	
H19	3	土師器	坏	(16.0)	(13.6)	(4.4)	ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラケズリ	Ⅱ区	
H19	4	土師器	坏	14.5	8.8	4.1	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ	カマド焼土	
H19	5	土師器	坏	(16.6)	9.1	4.5	ヘラミガキ，黒色処理	ヘラケズリ、ヘラミガキ	Ⅱ区	
H19	6	土師器	坏	(16.2)	(9.4)	(3.3)	ヘラミガキ	ヘラミガキ、ヘラケズリ	カマド	
H19	7	土師器	坏	14.3	6.5	5.1	ヘラミガキ	ナデ	カマド焼土	
H19	8	土師器	鉢	(20.4)	—	(6.9)	ヨコナデ，黒色処理	ヨコナデ、ヘラケズリ	カマド	
H19	9	土師器	甕	12.6	6.1	16.8	ヘラナデ	ヘラケズリ	Ⅱ区床面	
H19	10	土師器	甕	18.0	—	(20.1)	ヘラナデ	ヘラケズリ	Ⅰ区床面	
H19	11	土師器	壺	17.5	—	(32.3)	ヘラナデ、ヘラミガキ	ヘラミガキ	Ⅰ区床面	
H19	12	土師器	壺	—	7.6	(11.0)	ハケ目、ヘラナデ、ヘラミガキ	ヘラケズリ、ヘラミガキ	Ⅰ区床面	
H19	13	須恵器	蓋	—	—	(2.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	Ⅰ区	
H19	14	須恵器	甕	—	—	(3.1)	タタキ、ナデ	タタキ	Ⅳ区	
H19	15	石器	剥物石	9.8	6.0	3.5	縁辺に使用痕		P1	
H19	16	石器	剥物石	10.5	7.9	2.4			Ⅰ区床面	
H20	1	土師器	蓋	—	—	(1.5)	ヨコナデ	ヨコナデ	Ⅳ区	
H20	2	土師器	高坏	—	(12.2)	(2.2)	ヘラナデ	ヘラミガキ	Ⅰ区	
H20	3	須恵器	坏	—	(6.0)	(2.3)	ロクロナデ	底部ヘラ切→ナデ ロクロナデ	Ⅳ区	
H20	4	須恵器	壺	—	—	(1.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	Ⅰ区	
D1	1	須恵器	坏	—	(6.0)	(1.1)	ロクロナデ	底部ヘラ切，ロクロナデ		
D1	2	須恵器	甕	—	—	(3.0)	ロクロナデ	ロクロナデ		
D1	3	須恵器	甕	—	—	(7.2)	タタキ	タタキ		

第４表　遺物観察表４



調査区遠景（北から　右奥が蓼科山）

調査区全景（北から）

調査区東側完掘状況（東から）

調査区中央部完掘状況（西から）

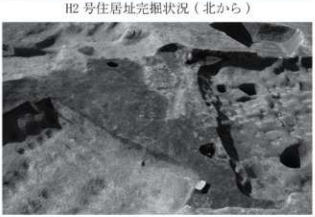
調査区西端部完掘状況（西から）

H1 号住居址完掘状況（南から）

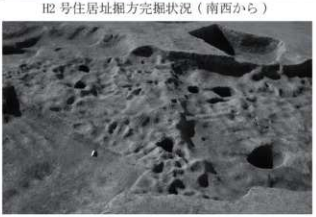
H1 号住居址掘方完掘状況（南から）

H2 号住居址完掘状況（北から）

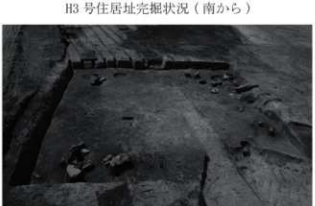
H2 号住居址掘方完掘状況（南西から）



H3 号住居址完掘状況（南から）



H3 号住居址掘方完掘状況（南から）



H4 号住居址完掘状況（東から）

H4 号住居址完掘状況（西から）

H4 号住居址カマド完掘・遺物出土状況（南から）

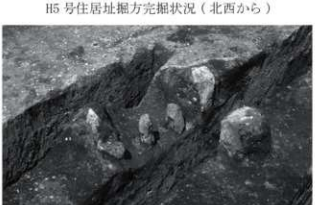
H4 号住居址掘方完掘状況（東から）

H4 号住居址掘方完掘状況（西から）

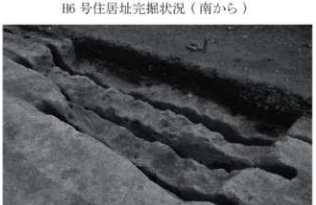
H5 号住居址完掘状況（北から）

H5 号住居址掘方完掘状況（北西から）

H6 号住居址完掘状況（南から）



H6 号住居址カマド完掘状況（南西から）



H6 号住居址掘方完掘状況（北西から）

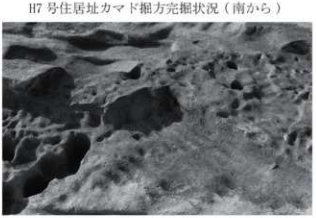
H7 号住居址完掘状況（南から）

H7 号住居址完掘状況（北から）

H7 号住居址カマド完掘状況（南から）

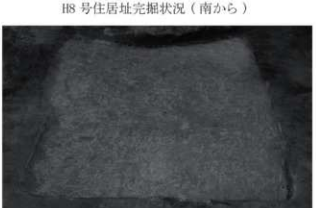
H7 号住居址カマド掘方完掘状況（南から）

H7 号住居址掘方完掘状況（南から）

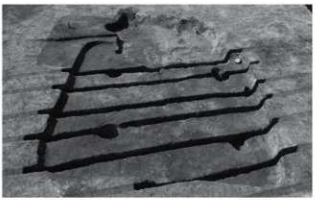


H8 号住居址完掘状況（南から）

H9 号住居址完掘状況（南から）



H9 号住居址掘方完掘状況（南から）



H10 号住居址完掘状況（南から）

H10 号住居址掘方完掘状況（南から）

H11 号住居址完掘状況（南から）

H11 号住居址カマド完掘状況（南から）

H11 号住居址掘方完掘状況（南から）

H11 号住居址土層断面（北から）

H12 号住居址完掘状況（南から）

H12 号住居址カマド完掘状況（南から）

H12 号住居址掘方完掘状況（南から）

H12 号住居址掘方完掘状況（北から）

H13 号住居址完掘状況（北から）

H13 号住居址掘方完掘状況（北から）

H14 号住居址完掘状況（南から）

H14 号住居址掘方完掘状況（南から）

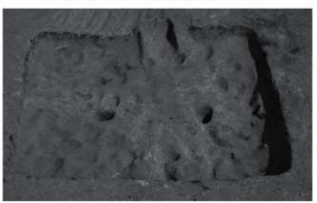
H15 号住居址完掘状況（南から）

H15 号住居址掘方完掘状況（南から）

H16 号住居址完掘状況（南から）

H16 号住居址カマド完掘状況（南から）

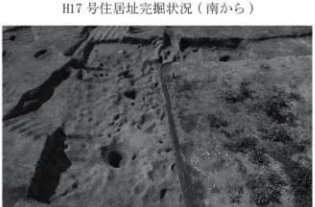
H16 号住居址カマド掘方完掘状況（南から）



H16 号住居址掘方完掘状況（南から）

H17 号住居址完掘状況（南から）

H17 号住居址完掘状況（北から）



H17 号住居址掘方完掘状況（南から）

H17 号住居址掘方完掘状況（北から）

H18 号住居址掘方完掘状況（南から）

H18 号住居址掘方完掘状況（北から）

H19 号住居址完掘状況（北から）

H19 号住居址カマド完掘状況（南から）

H19 号住居址カマド掘方完掘状況（南から）

H19 号住居址掘方完掘状況（北から）

H20 号住居址完掘状況（南から）

H20 号住居址掘方完掘状況（南から）

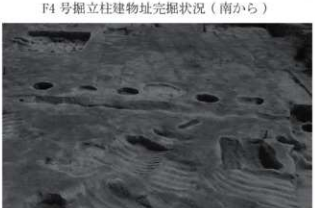
F1 号掘立柱建物址完掘状況（南から）

F2 号掘立柱建物址完掘状況（南から）

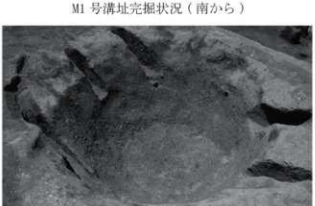
F3 号掘立柱建物址完掘状況（南から）

F4 号掘立柱建物址完掘状況（南から）

M1 号溝址完掘状況（南から）



M2 号溝址完掘状況（西から）

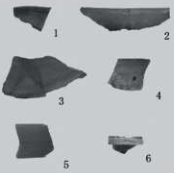


D1 号土坑完掘状況（南東から）

D2 号土坑完掘状況（北から）

H1 号住居址出土遺物

H2 号住居址出土遺物



H3 号住居址出土遺物

H6 号住居址出土遺物

H4 号住居址出土遺物

H4 号住居址出土遺物

14

1

15
(1 : 2)

18

19

22

23

16
(1 : 1)

17

20

21

H7 号住居址出土遺物

1

2

3

4

8

9

5

6

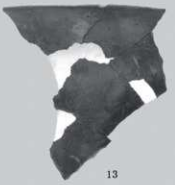
7

10

11

H7 号住居址出土遺物

12


13

15

14

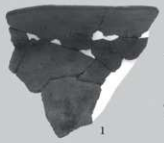
16
(1：1)

17

18
(1：2)

19
(1：2)

H10 号住居址出土遺物


1

2

3

4

H11 号住居址出土遺物

1

2

3

4

5

6

7

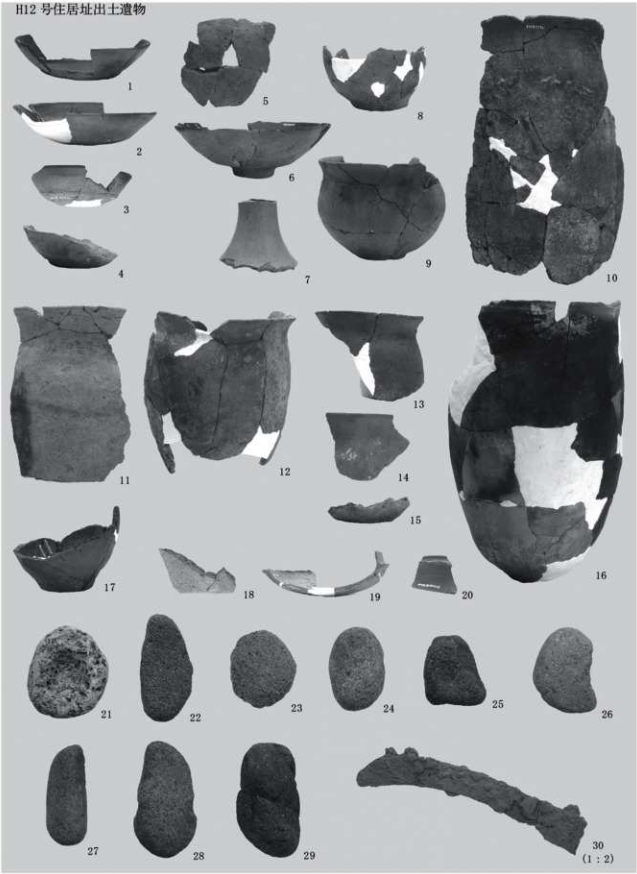
8

9

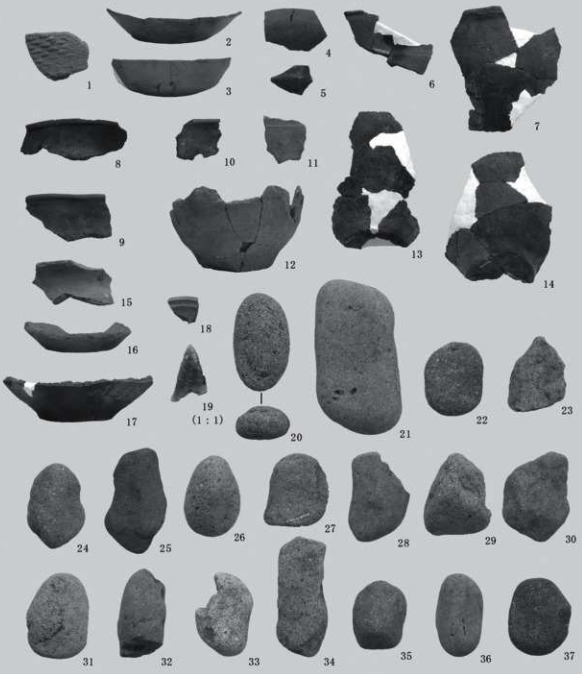
10

11
(1：2)

H12 号住居址出土遺物

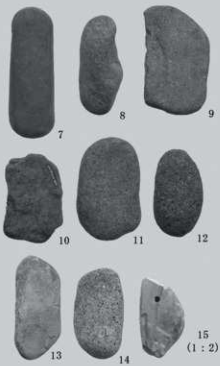


H13 号住居址出土遺物



H14 号住居址出土遺物

H14 号住居址出土遺物

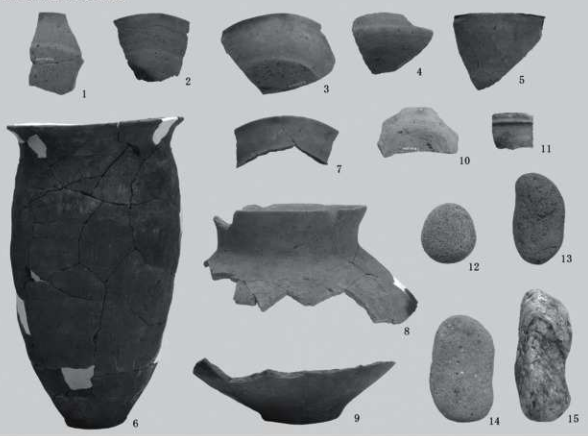


H15 号住居址
出土遺物

H16 号住居址
出土遺物

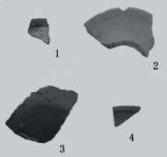
H18 号住居址
出土遺物

H17 号住居址出土遺物

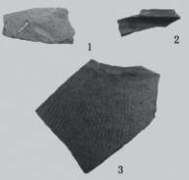


H19 号住居址出土遺物

H20 号住居址出土遺物



D1 号土坑出土遺物



報告書抄録

ふ り が な	ながとろいせきぐん　かみひじりぱたいせきろく
書　　名	長土呂遺跡群　上聖端遺跡Ⅵ
シ リ ー ズ 名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 282 集
編 著 者 名	久保　浩一郎
編 集 機 関	佐久市教育委員会　文化振興課
所　在　地	長野県佐久市中込 2913　Tel:0267-63-5321　Fax:0267-63-5322
発 行 年 月 日	令和 3 年 (2021)　9 月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
ながとろいせきぐん かみひじりぱたいせきろく 長土呂遺跡群 上聖端遺跡Ⅵ	さくしながとろ 佐久市長土呂 140-1 他	20217	9	36° 17′ 14″	138° 28′ 26″	20200402 ～ 20200608	1,820	倉庫 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長土呂遺跡群 上聖端遺跡Ⅵ	集落址	古墳時代 奈良・平安時代	竪穴住居址 20 軒 掘立柱建物址 4 棟 土坑 2 基 溝址 2 条 ピット 35 基	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、石器、石製品、土製品、鉄製品	

要　　約	佐久市北部の濁川左岸台地上に展開する古墳時代後期から平安時代の集落跡の一部を調査した。北側の聖原遺跡から続く大規模な集落の西端部と考えられ、古墳時代後期から平安時代の住居址 20 軒等が検出された。

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第 282 集
長土呂遺跡群　上聖端遺跡Ⅵ
令和 3 年 (2021)　9 月
編集・発行　佐久市教育委員会事務局
〒385-8501　長野県佐久市中込 3056
社会教育部　文化振興課文化財事務所
〒385-0051　長野県佐久市中込 2913
Tel:0267-63-5321
印刷所　双葉印刷